
あの日の空の色

玄雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の空の色

【Nコード】

N3554I

【作者名】

玄雪

【あらすじ】

皆月暁斗は父・朔夜と共に何事もない日常を送っていた。しかしある日、日常は彼らの期待を裏切り大きく変わり始める。

朔夜によく似た転校生・常磐蒼衣とその叔父・常磐要が現れたとき、暁斗の日常は崩された。彼らが語る朔夜の罪。それは彼が暁斗の母を殺したということだった。

父の罪とは何か、そして母の死の真相とは。

一人の女性によって繋がれた四人の大人と子供。彼らはどのような終わりを見つけるのか。そしてその先にあるものとは…。

第一話 黎明

皆月暁斗、主人公。

十四歳、市立中学二年。

九月十五日生まれ、A型。

東京在中。父と二人暮らし。

趣味・テレビゲーム。

座右の銘・『終わりよければすべてよし』

好きなもの・サッカー、ゲーム。

嫌いなもの・勉強、にんじん。

得意なもの・運動全般。

理解不能なもの・父。

理解不能なもの・父。

皆月暁斗の父は三十代だ。それだけなら何もおかしいことはないだろう。だがそう言えるようになったのは今年に入ってからだ。皆月暁斗の父は今年、ようやく三十歳となった。

はつきり言おう。おかしい。

暁斗の若すぎる父はまだ二十代で十分通じる若さを見せている。そのため余計親子には見えない。

暁斗は一度、年をごまかしているのではないかと考えた。しかし父は証拠品として自分の保険証・免許証さらには高校時代の学生証

まで見せた。

「おまえは足し算もできないのか？」

そう言って馬鹿にされたのはそう昔ではない。暁斗はもちろん足し算ができる。たとえ数学が苦手でも算数はできる。父の生年月日に三十を足せば今年になる。しかし足し算ができるなら引き算もできる。

父の年齢から自分の年齢を引くと十六となる。つまり父が父となつたのは高校生の時だ。さらに言えば母に自分を孕ませたのはそれよりも前だ。父に訊くと十五の時だと答えた。下手をすれば中学生の時だ。父もはつきりと覚えてないが、少なくとも高校に入学する前だと言っていた。

日本で男性が結婚を許されているのは十八歳。父はそれよりも二年も早く一児の父となっていた。

やはりおかしい。

しかし暁斗の父・皆月朔夜はそんなことまったく気にせず、自分の道を進み続けている。世間体などお構いなしだ。

暁斗も自分の出生についてはあまり深く訊いたことはない。語れる人間は少ないし、母はすでに亡くなっているからだ。

幼い頃、暁斗は無知故、父になぜ自分には他の子供達のように母親がいないのかといたことがある。そして自分も母親が欲しいと言った。

その頃の彼には「死」というものが理解できていなかった。だから父が「死んだ」と言っても納得できなかった。しまいには父のせいで母がいないのだとさえ言ってしまった。その時の父の顔は忘れられない。まるで囚人が改めて自分の罪を暴露されたような、そんな顔だった。

以来、暁斗は父に母のことを訊かなかった。なぜ死んだのかも、いつ死んだのかも、詳しいことは何も知らされなかった。父もわざわざ話そうとしなかった。

母の親戚とは母の死以来連絡をとっていないらしい。それでも不

満はなかった。何も言ってこない顔も知らない親戚より、身近にいる父の方が重要だったからだ。

だから母のことはほとんど知らない。

「親父、いつまで寝てるんだよ。もうとっくに日は昇ってるぞ」

いつも通りの平日の朝。日本のほとんどの家庭がそうであるように、皆月家の一日もまたいつも通り始まる。

「うるせえな。現役中学生とは違って忙しいんだよ。もう少し寝させる馬鹿息子」

寝癖だらけの頭をぼりぼりと搔き、あくびをかみしめつつ、よれのワイシャツを着た暁斗の父・皆月朔夜は姿を見せた。

昨日着ていた服装のまま、眼をこすりつつ歩く姿はだらしないの一言だが、容姿はけっして悪くない。上の中から下といったところだ。身長は日本人の中では高めの百七十八センチ。染めたことのない黒髪は伸ばしっぱなしでろくに手入れもしていないくせに艶がある。睫毛は長いし、ほとんど外に出ないため肌は白い。手足のバランスも良く、運動もしてはいなくせに太っていない。

見た目は悪くない。しかし性格は良くない。

「あー！ またそのまま寝てたのか！ ワイシャツにしわが付くだろ！ 寝るならちゃんとパジャマに着替えて寝ろ！」

主夫のようだ。

家の家事は二人で当番制で行っているのだが、父は適当なところがある。それに対し暁斗は文句を言いながらも中途半端を許さない。同じ環境にいらながらもまったく違う性格となった親子だった。

「面倒くせえんだよ。夜遅くまで仕事をしていたお父様を労えよ」
「うるせえ。さっさと着替えてさっさと食え」

そう言っただけで暁斗は自分の席に着いた。

目の前には先程自分が作った朝食がほかほかと湯気をあげて並んでいる。

今日の朝食は炊きたてのご飯、ヒラメの焼いたものに豆腐と油揚げの味噌汁、卵焼き、味付け海苔、ほうれん草のごま和え。どこからどう見ても完璧な日本人の朝食だ。

父は着替えを終え、暁斗の向かいにある自分の席に座った。そして「いただきます」の挨拶もなしに箸を取り、白いご飯に箸をつけた。

挨拶をしない理由は不信心者だからだというものだ。それでも暁斗は一般常識として少なくとも人前では挨拶をするよう言われていた。これは彼の父が息子に教えた数少ないことだ。自分が非常識だということに自覚はあるのか、息子には常識をなるべく守るように言ってきた。

特に会話もないまま朝食を終える。一足先に食事を終えた暁斗は自分の食器を流し台に持って行き水を張ると、洗面所へ行き歯磨きをする。

その間に父も食事を終え、流し台で食器を洗い始める。朝食後の家事は父の役割だ。

身支度を終わると暁斗は学校へ出かける。玄関で靴のひもを結んでいる暁斗の後ろから父が声をかけた。

「暁斗、今日の晩飯は何がいい？」

「んー、肉が食いたい」

「俺は魚の方がいいんだけどな……」

「ダメ、豚か牛」

もしくは鶏。そう言って暁斗は「いってきます」と言って外に飛び出していった。

暁斗のいなくなった家は静かになり、名残として自転車が走り去る音がした。

一人になった朔夜は大きくあくびを出すと、リビングでソファに寝そべり、今朝届いた新聞を読み始める。

新聞には政治家の汚職事件が大きく取り上げられ、他には隣の区で起こったひき逃げ事件や未成年による傷害事件などが載っていた。いずれも朔夜の世界に直接関わりのない世界の出来事である。

隣の家が家庭事情など別の国の話だし、自分の視界にすら入らない土地など異世界に等しい。朔夜にとっては自分の世界だけがすべてである。

一通り新聞に目を通すと、新聞をテーブルの上に乗せ、仕事のために読めていなかった本を読み始める。

活字中毒だと昔から言われてきたが、その通りなのだろう。昔と言ってもそれほど昔ではない。正確には昔もしたが、一時期はそれほど読んでいなかった。その頃にはそれよりも夢中になるものがあったからだ。

本日三度目のあくびをした朔夜は本を読むことを諦め、再び寝ることにする。先程息子に注意されたので、今度はパジャマに着替える。そのまま昼まで寝るつもりだ。

朔夜はふとリビングに掛けられているカレンダーを見た。今日は九月十日。もうすぐ息子の誕生日だ。そしてあの日も近づいている。「……もう十四年か。早いな……」

朔夜は自分の部屋の引き出しから一冊のノートを取り出した。マジックペンで書かれた教科名と自分の名前。お世辞にもきれいとは言えない字。今の自分の書く字とはまったく違う。それでも同じ特徴の残る青春時代の痕跡。

ぼんやりとそのノートを見ながら、朔夜は誰かに話しかけるように呟いた。

「もう俺の方が年上になっちいましたよ。ずるいよな、あんただ

けはずっと変わらないなんて」

一緒に変わっていきかった。一緒に年をとって、一緒に立ち止まって、一緒に進んで、一緒に死ねるとは言わないけど、一緒に生きたかった。

あの頃描いていた夢想は所詮夢でしかなくて、現実という夢から覚めるのを待っている。

もうどの現実にもあなたはいない。

俺は一人、残酷で優しい過去の夢を見る。

夢の中でもあなたには手が届かないとわかりながら、夢にしがみつこうとしている。こんな自分は弱いのだろう。弱くて、誰かの手がなければ立ち上がることもできない。暗闇の中で歩くこともできない。だけど手に触れるのが恐い。あなたのぬくもりを忘れてしまえそう。

成長しないはずの俺は変わっていく。あなたを残して。

皆月暁斗の生活はいつも通り始まる。生活ペースの狂っている父親を起こし、朝食を食べ、身支度を調えて学校へ行く。父親との愛情溢れる会話などない。生活の一部となっている問答をするだけ。

今の生活に不満をもつことはない。母親がいないことも気にしなくなった。父親は冷たいわけではないが愛情深いわけでもない。放任主義というやつだろう。しかし誕生日はどんなに仕事が忙しくても祝ってくれる。参観日にも来てくれるし相談すればきちんと答えてくれる。

はつきりとした愛情はないが彼なりの愛情を注いでくれていることはわかっている。だからこれ以上を望んだりしない。不満もない。望みも不満もない冷めているようでどこか暖かい日常。

これからも当たり前前のようにこんな生活が続くのだと思っていた。これ以上大きく変わることはないと思っていた。

だけど、ある日それは崩れた。砂の城が波に流され崩れるように。最初から赦されなかったのか。普通の幸せさえも罪人には、罪から生まれた者には。

もう二度と戻らぬ日々よ、別れすら告げる暇もなく去るのか。

それとも今までは幸せな夢だったのか。夢から覚めた咎人に残酷な現実が突きつけられる。

残酷な朝が訪れる。

朝の挨拶が行き交う校門。生徒も教師も一日の始まりを実感する。いつも通りの平日の朝。いつも通りの学校。そこから始まった。

気づかないうちに、しかし確実に。

「おっはよう！ 暁斗」

元氣すぎる挨拶をぶつけてきたのは友人その一。

「桃園、そんなでかい声を出さなくても聞こえてる」

こんな会話も暁斗にとっては日常茶飯事。

「何言ってるんだよ。朝の挨拶は元氣が肝心だろ？」

そんなもの聞いたこともない。

「皆月おはよう。そして馬鹿菌発生装置にも一応あいさつしておいてやる。おはよう、そしてさらばだ、今すぐ帰れ」

その後ろから挨拶と言えるのかわからない挨拶をしている友人その2が現れる。

「何だよ馬鹿菌発生装置って、俺は機械か！ だいたいおはようって言うてすぐにお別れかよ」

馬鹿扱いは別にいいのか。というか認めているのか。

「いや、友人を物扱いなどしない。なぜなら僕は無機質に話しかけるような変人ではないからな」

友人その二こと島村は毒舌だ。しかも容赦がない。このコントも、もはやこのクラスの名物となっている。

「お前朝から機嫌悪いな。どうしたんだよ？」

言われてみれば眉間に皺が寄っているように見える。

島村は平穏な朝には似合わない盛大なため息をわざとらしく吐いた。

「記憶力のない桃園との会話には疲れる。しかたない、そんな桃園のために貴重な時間を割いて説明してやろう。僕がこんなにも不機嫌なのは君が昨日の夜遅く女にふられたという愚痴を何時間も電話で話していたからだ。何度電話を切ってもかけ直してくるし、聞いているフリをして放っておこうと思えば返答を求めてきたり。やはりこの世に害をもたらずしか脳がない存在だな、今すぐその窓から飛び降りてくれ」

「待て、ここは三階だ。下手すりゃ死ぬぞ」

「死んでもらってかまわない。むしろ死ぬ」

「かまうって！」

運が良ければ死なないかと暁斗は窓の下を見下ろした。ちょうどグラウンドを走っていた運動部が真下を通り過ぎていくところだ。

しかし骨ぐらいは折りそうだ。

「だってよう、遂に見つけたと思った理想の相手が実は彼氏持ちだなんて。しかも顔が平凡な男には興味が無いって言うんだぜ。ひどいだろ」

恋愛至上主義の桃園はいつも女に振られる。そしてその愚痴を島村にして痛烈な毒舌を喰らう。よくあることだ。

「確かに外見を重視することは相手に失礼なことなのかもしれない。しかしここで彼女が内面を重視するような女性であっても君はふられるだろう。なぜなら君は馬鹿菌を吹きまくる馬鹿菌発生装置だからだ。ただの馬鹿なら本人だけで済むが、君の場合周囲にまで被害

が及ぶ。やはり有害生物だな、これ以上被害を出さないうちに死ぬことをお勧めする、というか死ね」

「結局はそれか！　というか死ね死ね言うな！」

もはや涙目で言い返すが、島村には何の効果もない。

「言われたくなければさっさと死ねばいい。そうすればもう言ったりはしない」

「うっ」

本当に泣きそうだ。

「お前なんて大嫌いだっ！」

そう叫びながら桃園は教室から飛び出していった、扉から。

その後ろ姿を見送りながら島村が言ったことは、

「出て行く場所を間違えている。出て行くのならこっちだ。それにもうチャイムが鳴るぞ」

だった。そう言って彼は窓を指さしていた。

それからすぐにチャイムが鳴り、学校生活の一日の始まりを告げた。

桃園が急いで帰ってきて、担任に言い分を聞いてもらえず遅刻扱いにされるのもよくあることだ。だから今日もそうなるだろう。

いつも通りの朝の光景だ。ここまではいつも通り。変化はない。

ガラリと音を立てて引き戸が開かれた。

担任がいつも通りの顔で入ってくる。だが、いつもは入ってすぐに閉じられるはずの戸が閉じられなかった。いつもと違った。

そして開放されたままの戸からもう一人の来訪者が姿を見せる。そこにいつもの日常はなかった。

第二話 東雲

皆月朔夜、暁斗の父親。

三十歳、小説家。

十二月二十日生まれ、O型。

東京在中、息子と二人暮らし。

中学卒業、家族とは絶縁状態。

趣味・読書。

座右の銘・『我思う故に我有り』

好きなジャンル・推理、ノンフィクション。

嫌いなジャンル・恋愛。

既婚歴なし、受賞歴あり。

既婚歴無し。

元々両親との仲は良くなかった。

人付き合いも悪く、不登校になりがちで家にこもりきりの息子に与える愛情など最初から持ち合わせていなかった。

それは両親の責任でも朔夜本人の責任でもない。ただ、家族という関係でやっていくことはできなかったのだろう。ただその関係を間違えてしまったただけだ。それは誰の責任でもないだろう。生まれたときから間違っていたのだ。

朔夜自身、それはよくわかっていた。だからその関係を修繕しようとはしなかったし、愛情を求めようとしなかった。

不登校になった理由など語るほどの価値もないものだし、それま

での人生も誇れるようなものではない。ただ生きているだけの人生だった。

それが変わったのはあの人に会ったから。

それまで白黒だった世界に色が付いた。初めて生きていることに喜びを覚えた。未来を夢見た。

何事にも適当だった自分があの人のことだけを考えた。自分だけを見て欲しくて、自分のことだけを考えて欲しくて、ずっと一緒にいたくて……。

子供じみた独占欲。その時の俺は今以上に馬鹿だったから、愛情が時に人を傷つけるということすら知らなかった。

たくさんぶつけて、傷つけて、最後には後悔だけが残った。

想いは刃。恋は麻薬。得るものは何もない。

その日、二年一組の教室はいつもと違う朝を迎える。

担任に続いて入ってきた生徒。しかし誰も知らない生徒。

教室中がざわめく中、担任は教壇から生徒達を見渡す。

「えー、今日は転校生を紹介する」

そう言つて黒板に名前を刻む。

「常磐蒼衣君。最近まで海外にいたそうだ。仲良くしろよ」

教室中が好奇心に満ちている。

「常磐蒼衣です。よろしく」

初めて聞くその声は十四歳の少年らしい、子供らしさの残る声。身長は少し大きめの百七十あるかないか。顔立ちはまだ幼さが残っているが、それなりに整っている。

新たなクラスメイト達の好奇心に満ちた視線を受けながら、転校生は指示された席に着く。暁斗の後ろの席だ。教室の角。黒板から

もドアからも一番遠い。人数の都合でその席は五ヶ月間、主を持たないまま放置されていた。そこがようやく生徒の所有物となる。

暁斗は他のクラスメイト達と同じく新たな同級生に興味を持っていたが、後ろに座った彼の顔をしっかりと見ることもできないまま、担任は授業を始めてしまう。今日の一限目が担任の受け持つ教科だったことが不幸だった。

しかたなく生徒達は学生としての義務を果たすべく教科書やノートを机の上に広げる。それは暁斗や転校生も変わらず、すぐ後ろでゴソゴソとする音を耳にしながら暁斗は落書きだらけの教科書とノートを取り出す。

ちなみに桃園は運悪く一限目の授業すら遅刻扱いにされる。

それが始まりの日の始まり。

まだ誰もその始まりには気づかない

新たなクラスメイトに皆が興奮する。好奇心強い者は声を掛け、世話好きは学校の案内などを申し出る。

好奇心が強い者は暁斗の周りにもいる。暁斗の席からその明るく遠慮ない声を降らせる。

「はじめまして！ 俺、桃園健二。趣味はデート。学校の女子生徒はほとんど把握してるから訊きたいことがあったらいつでも言うてくれ。こっちは島村治。性格悪いからあんまり近づかない方がいいぜ」

当人を前に勝手な紹介を行っている友人。しかしそんなことを言えば後がどうなるかまだわからないのは、学習能力がないということとか、それとも今度こそ勝てるつもりなのか、どちらにしても勝て

ない勝負を挑むその姿はいつそのこと不憫だ。すでに悪魔はその隣で牙を尖らせているというのに。

「今こつちの呼ばわれた性格の悪い島村だ。紹介をしてくれた礼に俺も是非紹介させてほしい。これは生まれる先を間違えて人間に生まれてしまった世にも珍しい公害生物だ。感情が高ぶると身体から馬鹿菌を放出する。残念ながらこれを研究しようとする機関がないため、今現在も人間として学生生活を行っている」

「待て、そこまで言うか？　ていつか俺は生まれたときから今現在もこの先も人間の予定だ」

「人間ではないとは言っていないだろう。人間の中にも突然変異というものがある。それにこの公害生物を研究し、無害化する研究をしようとする者はいない。それはこの馬鹿は人知を越えた存在だからだ」

「そんなところで人知を越えてもうれしくない！ ていうか、俺は人間にも治せないほどの馬鹿だって言いたいのか！？」

「それは間違いだ。人間に治せる馬鹿などこの世にはない。僕が言いたいのは君がいかに人間の範疇を越えた馬鹿かということだ」

それはもはや人間扱いされる方が哀しくないだろうか。

まだ言つつもりだ。

「馬鹿につける薬はないと言つしな」

「てっめええええええ！」

自己紹介どころか転校生のことなど忘れて獣のように叫ぶ友人を、
暁斗はやれやれとため息を吐きその視界から追い出した。

暁斗は改めて転校生に向き合う。自分よりも数段整っていると思ふ顔は、いずれ見目美しくなることを予感させる。黒い髪は少年らしく短く切りそろえられている。そこには艶やかさがあり、つい触れてみたくなる。長い睫毛から覗く瞳には強さがあり、意志の強さを表している。

そこまで観察して暁斗はふと気付いた。誰かに似ていると思った。

誰かは思い出せないが、かなり身近な誰かだ。

しかしその思考に埋もれてしまつて目の前の転校生のことをすっかり忘れていることに気づいた。目の前の少年は考え事をしている。暁斗の顔をじつと見ていた。人を前にして相手のことを忘れるとは、これでは桃園のことを笑えないかと反省しつつ、今度こそ目の前の人物に微笑みかける。

「初めまして、俺は皆月暁斗。前の席だから何かわからないことがあつたらいつでも言つてくれな」

それを聞いた彼の表情が、わずかに動いた。

「皆月……暁斗？」

「うん、そう。それがどうかしたか？」

わずかな変化は社交的な微笑みによつてかき消された。

「いや、知り合いに同じ名字がいるから……。ところで『アキト』つてどういう字書くんだった？」

その言葉によつて隠された心中の言葉に暁斗は気づかなかった。

ただ社交的な奴なのだと思つただけだった。

「ああ、暁と北斗七星の斗で暁斗」

「変わった名前だね」

「ああ、親父の話じゃ暁の星つて意味があるらしいけど」

蒼衣の表情がまた揺らいだ。しかし暁斗は気づかない。

「それって明けの明星のこと？」

「？ 何それ？」

「金星のことだよ。朝日が昇る頃に見えるんだ。逆に夕日が沈む頃の金星を宵の明星っていうらしい」

初めて聞く説明に、暁斗は素直に感心する。

「へー、知らなかったな。まあ、どういふつもりで付けたかは知らねえけどな」

「誰が付けたの？」

「さあ？ たぶん親父かな。うち母親いねえし」

「あ、ごめん」

「いいよ、気にしなくて。俺もまったく覚えてねえから」

それは真実だ。母親の思い出と名の付くものなど一つも残されていない。写真も、ビデオも、その姿を写した物は一切残っていない。だから暁斗は母親の姿を知らない。父親の話では自分自身、母親似だそう。しかし彼女の方がよっぽど美人だったといういらぬおまけ付きの話だったが……。まあ、自分が父親似ではないことはよくわかっていたし、暁斗はそれほど気にしなかった。

「常磐の名前も変わってるな。普通『アオイ』って花の葵って字使うのにな」

「ああ、死んだ母親が付けたいらしい。意味は知らないけど……」

「あ、ごめん」

数十秒前に自分に対して言われた言葉を暁斗は繰り返す。

「いいよ、そっちも気にしなくて。僕を産んですぐに死んだらしいから」

ほとんど同じ気遣いの言葉。しかしそこにはどこか寂しさが感じられた。

普通母親がいなければさみしいものだ。と暁斗は考えた。暁斗は子供の頃に母親のことを考えるのをやめた。正確には完全にやめたというよりも、母親がいらないことを気にするのをやめた。記憶になり母親のことよりも、今一緒にいる友人や父親のことの方が暁斗にとっては重要だったからだ。それでも時折母親のいる家庭を羨ましいと思う。父親に不満があるわけではないが、自分にはないものを欲しがる気持ちは確かにあった。そんなこと父の前ではけっして言うはずもないことだが……。

彼も寂しいのかもしれない。そう思うと失礼かもしれないが共感してしまう。

「じゃあさ、父親は？　あと兄弟とかいる？」

しかしその質問をしたことを暁斗は後悔する。

「兄弟はいるらしい。だけど僕の父親だっていう人はその兄弟連れてどこかへ行ってしまったらしい。今は母方の叔父と一緒に暮らし

ている」

もしかして複雑なお家事情に首をつっこんでしまったのだろうか。暁斗は何と言って良いのかわからず、その場で固まってしまう。

そんな暁斗に蒼衣は気にすることないと言う。

陰気なところもなくそんな風に言われれば、暁斗もそれ以上考えはしない。暁斗の悪いところは相手の表面に集中してしまいその裏側にまで気が回らないことだ。

だから蒼衣の心中など気付くはずもなかった。ここで彼が何かに気付いていれば、別の未来があったのかもしれない。しかしそうなりはしない。明けの明星はただ太陽と共に天へ姿を見せるだけだ。ただ、そうすることだけを疑問もなく続けるだけだ。

だからこれが運命と名の付くものであるのなら、こうなることが運命なのだろう。いや、運命という大それた名前で表す必要はない。自然の法則というものだ。ただ生き物が生きるように、花が春に咲くように。何の疑問もない法則という歯車の中。

ただ星は自分の空しか見ない。星が見えなくなる頃に広がる青空のことなど考えはしない。

その日、帰宅した暁斗を迎えたのは玄関に並べられた一足の靴だった。立派な革靴は、どう見ても父の物ではない。かといって暁斗の物にしては女物だ。しかし見慣れたこの靴から、暁斗は自分のよ

く知る客人の到来を知った。

リビングへ行けばそこには予想通りの人物の姿があった。

リビングでテーブルを挟み向かい合いソファに座る二人の人間。

一人は彼の父。そしてもう一人は上下を紺色のスーツで決め、スラックスに覆われた細長い両足を礼儀作法の手本のようにそろえ、その膝の上に形の良い手を重ねている女性。

二人の目の前に置かれた珈琲はまだ温かい証拠の湯気を漂わせていた。

声を掛けるまでもなく彼女は暁斗の帰還に気づいた。

「あら暁斗君、お帰りなさい」

「ただいま。麗子さんもいらっしやい」

優しく微笑み返す彼女は金村麗子。作家・皆月朔夜の担当編集者である。

大人の女性という雰囲気彼女は朔夜よりも年下であるが、その仕事ぶりや人格はしつかりしており、ずばらなところがある朔夜を担当になってから数年間支えてきた。朔夜が社会人として生きられるのはこの人のおかげではないかと暁斗は思っている。

ちなみに前の担当者は胃を壊して退職した。原因は子守を押しつけ、さらに締め切りをほとんど守らない朔夜にある。

しかし金村が担当になってからは朔夜もあまり締め切りを破らなくなり、その頃には暁斗も学校に行くほど大きくなっていたので、彼女がその苦しみを味わうことはなかった。締め切りが破られなくなっただけ、彼女の手腕によるものである。

「確かに原稿戴きました。それで先生、前に頼んだもう一つの方の進み具合はどうですか？」

今朔夜は普段の分とさらにもう一つ、雑誌の別冊に載せる小説を書いていた。

「……まだ最初の方だけ」

そう答える朔夜の視線は窓の向こうへと逃げていた。金村は微笑を絶やさず、あくまで優しそうな声で言った。

「先生、締め切りまで二週間もないのわかってますよね？」

「……うん」

「締め切りまでに書けますよね？」

「……たぶん無理」

答える声はかなり小さい。それでもしつかりと彼女の耳には届いている。

「書けますよね？」

顔はやはり笑ったままだ。しかしその笑顔の裏側に羅刹がいることを朔夜は知っている。

「……」

「書けますよね？」

だんだんと声が強くなっている。

「いや、だから——」

「書けますよね？」

「……書きます。書かせていただきます」

ガラガラと冷や汗が朔夜の頬を伝っているのは見間違えではないだろう。ここで「できない」と答えれば生きて明日の日を拝めるかも怪しくなる。

ようやく観念した様子の朔夜に満足した金村は、腰を上げ帰り支度を始める。自分の分の珈琲を一気に飲み干し、スーツについた皺を直す。

「それじゃあ先生、また様子を見に来ますから。お仕事がんばってください（訳ノそれまでに書いておけよ）」

「……はい」

「暁斗君、またね」

そう言っただけで静かな嵐は去っていった。

嵐が去った後にはうなだれる朔夜と、そんな父を見下ろしている暁斗が残された。

「親父、夕食の支度はした？」

ここで全く違う話題を出すのは暁斗なりの心遣いだ。

「……まだ」

「じゃあ今日は俺が代わってやるよ」

これも暁斗なりの気遣いだ。

「サンキュ。俺は仕事してくるわ」

そう言つて自室に戻る父の暗い背中を暁斗は見送った。

締め切り前に暁斗が家事を代わるのはよくあることなので、代わること自体に苦はない。

台所にはすでに買われた材料が置かれていたので、暁斗は買い物袋から材料を出して並べた。今朝暁斗が出したリクエスト通り、そこには豚肉があった。

暁斗は手慣れた手つきで一つ一つを調理していき、余ったものや今日使わない分は冷蔵庫にしまった。

まだ夕食には早いので時間のかかるものだけ終わらせ、自分の部屋を掃除する。さらに洗面所のタオルを変え、観葉植物に水をやる。ちなみにこれは暁斗や朔夜が買ってきたものではなく、朔夜の友人が買ってきたものだ。その友人の話では、この家はあまりにも殺風景だから少しはマシになるだろうとのことだった。

今はそれほどではないが、暁斗がまだ小さかった頃は実用主義である朔夜がまったく装飾品を飾らなかったため、絵どころか写真も置かれていなかった。まるでモデルハウスのような感じだった。昔はやってくる客もほとんどいなかったのかまわなかったが、暁斗が小学校に入ると友人を連れてくるのが多くなったので、何もしない父親に代わって持ってきた観葉植物や絵などを飾っていったのだ。

朔夜は未だにそういったものに興味を持たないので、暁斗がそれらの管理をしている。暁斗はまだ父親よりはそういったものに理解があった。自分の部屋には好きなサッカー選手のポスターや、小学校で作った工作などが飾られている。

そういえば最近あの人に会っていないなと父の友人のことを思い出し、そして次に会ったら何から話そうかと考えながら暁斗は夕食までの時を過ごした。

夕食に並んだのは暁斗のリクエストから豚のシヨウガ焼き、冷や奴、カボチャのスープ、シーフードサラダだ。サラダは朔夜の希望を幾分か譲渡したものだ――買ってきた材料の中に魚類が入っていた。

今日は徹夜なのだろうなとどこか疲れ切った顔の父を見て暁斗は思った。金村が帰ってから今まで休まず仕事をしていたのだろう。これでは締め切り前日は生きているかもわからない。

「親父、そんなんで参観日は来れるのか？」

暁斗の参観日は半月後だ。

「ん、行けるようにする」

「無理して来なくてもいいよ。もう中学生なんだし来る保護者も少ないし」

中学に入れば子供は大人になったつもりなのか、それとも大人らしいことをしたいのか、親に甘えなくなるし反抗もする。親からすれば一番かわいくない時期だろう。そういうわけで、中学の参観日は最初こそ文句を言わなくても、二度目三度目になれば子供の方が嫌がる。暁斗は嫌がるわけではないが、忙しいのに無理をして来てもらわなくても良いと遠慮するようにはなった。

「ガキが親の仕事を気にすんな。心配しなくて良い」

朔夜はそう言って子供の遠慮を受け流す。

「あつそ。まあ無理すんなよ」

そこで参観日についての会話は終わる。

「そういえばさ、今日転校生が来たんだ、うちのクラスに」

「ほお、男か？ 女か？」

「男。俺よりでかくて何か行儀良い奴」

「お前と比べればたいていの奴は行儀良いと思うが？」

他人のと言えるのか、自分がそうなったのは誰の影響だと思ってるんだ。そう心中で叫ぶが決して口には出さない暁斗だった。この父親に口で勝てた試しはない。

子どもはいずれ肉体的に親より強くなるが、精神面ではまだまだ勝ることはない。それは親が痴呆にでもかかるまでずっとだ。もっとも、この父親が痴呆にかかるなど想像も出来ないけど。

ましてや暁斗はまだ十四歳の子もだ。中学生を子どもと表現するのが適切かどうかは置いておくとして、自分の倍の時間生きている父親に精神面で勝つのはとうてい不可能である。もっともこの父親なら、たとえ年が一つしか変わらなくても勝てそうにないが。

「あ、そういえば」

そこで暁斗は思い出した。

「ん？ 何だ？」

「いや、たいしたことじゃないんだけど」

常磐蒼衣に会ったとき誰かに似ていると思った。その時はそれが誰か考える暇はなかったが、今気づいた。

彼は似ているのだ。今、目の前にいる父に。

第三話 薄暮

この世に運命じみた再会などありえない。生き別れの兄弟が知らないうちに再会するとか、そんな喜劇や悲劇はフィクションの世界でしか成り立たない。

もしあるとすればそれは誰かの策略の上で起こる予定された再会である。

（『運命―気まぐれな神の遊技―』三

星社出版 皆月朔夜）

重いハードカバーの本を開き、そこに記された文字を一つ一つ辿っていくその作業は、記憶という名のパズルのピースを一つ一つつなぎ合わせることに似ていると思った。文字と文字は組み合わせられる一つの文章となり、さらには一つの物語を作り出す。人の人生が物語なら、両者はよく似ているではないか。

ただし、この作者がそんなことを同じ事を考えていると思うと、せつかくの読書も気分を害するものとなる。いや、そもそもこの作者の本を読むこと自体不機嫌きわまりないものなのだ。

ならばなぜ本を読むのかと言われると、だからこそだと答えるだろう。

彼と自分の傷はよく似たものであり、まるで先に述べた二つの事柄のようだ。しかし似た二つのものはけっして同じではない。平行線がどんなに近くを通ろうとも、隣り合わせの両者はけっして交わることはない。そして彼と自分もけっして交わることはない。似た

傷を持つからこそ、そのわずかな違いやずれが修復のしようがない深い溝となる。

もともと自分たちに修復するような仲などなかった。知り合いの知り合いというありふれた関係。それが切っても切れない縁となつたのはなぜだろう。彼か、自分か、それとも彼女の責なのか。しかしその答えは必要ない。ただ彼と自分を繋ぐのは罪と血、そして憎しみなのだ。それだけがわかればそれでいい。

「叔父さん、ちょっといい？」

ノックの音と共に耳に届いたのは同居する甥の声だった。

「ああ、何だ？」

答えを聞いて扉の向こうから現れた甥は、どこか心配そうな不安そうな顔をしていた。

「叔父さん、本当に明日学校に来るの？」

「ああ、行く。」

迷いなく答える意地の返事に甥は戸惑いを隠せなかった。本当は来て欲しくない。そんな想いが心のどこかに存在する限りその不安が消えることはない。

普通の家庭にあるはずの叔父と甥の関係は、自分たちとは少し違うと考えていた。叔父が自分を見る目は叔父が甥を見る目だけではない。愛情と憎しみの混ざった名の付けようがない感情。その目に映るのは自分だけではなくそれに重なる誰か。最愛の人、もしくはこの世で一番憎い相手。愛する人の血を引き、憎い彼に似た顔をした自分を、叔父が育ててきた理由はただ一つだ。

叔父にとって自分はただの甥ではない。彼女の子、そして彼の子。愛と憎しみの結晶。決してそれ以上にもそれ以下にもなりはしない。「蒼衣、お前は何も心配しなくていい」

俺に任せておけばいいと、叔父は言った。それは蒼衣の意志も願
いもくみ取らない、自分の思いだけを心に描き、他者すらも巻き込
むゆがんだ望み。

復讐。何も生み出すことはない破壊行為。残るのは絶望。激しさ
の後には戦場跡のような荒野が広がる。そこに立つ者は誰もいない。
ただ風が残り香を吹き飛ばし、魂なき器は白い骨と化し、塵となる。
そこには記憶する者すらおらず、全ては過去へと消え去る。やがて
未来という名の町がそこに建ち、骸の上で新たな命が生まれる。
破壊の後には創造がある。神の意志などなくとも人は壊し、また
創る。その存在が消え去るその日まで――。

（『破壊と創造の協奏曲』

三星出版 皆月朔夜）

中学生の参観日となると微妙なものだ。小学校の頃には来ていた
父兄も、中学に入ると来なくなる者も多い。ましてや二年生となる
と、その数はさらに減る。

暁斗の父・朔夜は子育てに関してはほとんど放任主義だが、こう
いった学校行事には必ずと言っていいほど参加している。

しかし若すぎる父親というものはどこでも目立つものだ。本当に
血が繋がってるのかと疑われたことも一度ではない。最初の頃は
いちいち反論していた暁斗だが、成長するにつれ聞き流すようになった。
他人の言うことなど気にするなと言う父の言葉に従ったのだ。
実際、その方が楽なのだと理解した。

父子家庭というだけでも世間は注目する。それがさらに若すぎる父親となるとそれは「異常」だ。人は普通と異なるものを見つける、ほとんどの場合同じ行動を取る。廃するか、崇めるかだ。暁斗の家庭の場合、父・朔夜が名の知れた小説家だったのと、彼自身の人格のおかげでどちらにも属することはなかった。しかし注目だけは避けられない。だが、いちいち相手をしても疲れるだけだ。適当に聞き流すか二度と目を向けられないほどたたきのめすのが賢い選択だ。

朔夜は前者だった。自分が世間で言う「異常」に属していることを理解しながらも、「普通」に囚われない彼は、他人が語る普通論に耳を貸すことはなかった。

「普通であることは幸せなのかもしれない。しかしその普通を得ることが難しい人間もこの世にはいる。普通とは時代が定めた流れに身を任せることだ。

普通であることが悪いわけではない。だが自分が普通であるからといって、異常を廃することは赦されない。それは普通ではなく自分勝手だ。

本来この世界に普通など存在しない。すべてに通じる普通などあるはずがないからだ」 かつて朔夜が暁斗に言った言葉だ。

暁斗は父の言葉にほとんど従っている。彼が言う持論は独特で、しかし善悪を感じさせないものだった。その持論のほとんどを、朔夜は若い内に習得していた。

十六で父となった朔夜は人よりも早く大人になる必要があった。だから他の同世代の大人とは異なる雰囲気をもつ。

そんな父を暁斗は時にあきれ、時に尊敬してきた。

それが世の中で言う「異常」であったとしても、父の言う言葉は正しく聞こえたのだ。

参観日の朝となると、普段はない緊張感が教室に満ちている。それが何度目となるうとも、いつもとは少し違う一日に、皆が様々な心持ちで挑むのだ。

この日ばかりは忘れ物が少なく、身なりを整える生徒が多い。教師としてはいつもそれくらいやってほしいと思っているだろうが、生徒はそんなこと気にはしない。

身体がガチガチになるくらいの緊張ではなく、買ったばかりの本を初めて開くときのような緊張感。それを楽しみと感じる者もいれば、面倒くさいと感じる者もいる。感じ方は人それぞれだ。

暁斗は特別なことを感じることはないが、忙しい父がわざわざ自分のためだけに来てくれることに応えねばという想いがあった。実際彼が家を出るとき、父は徹夜明けで完成したばかりの原稿を前に屍と化していた。本当に來られるのかと心配したが、本人はそれでも行く気であるらしい。

「なあ、暁斗。お前んとこの父さんは来るんだよな。うちはバーゲンがあるから来ないって言うんだぜ。可愛い息子とバーゲン、どっちが大切なんだよ」

ぶつくさ文句を言う友人を前に、暁斗は「はあ」と適当な答えを返していた。その横から友人その二こと島村が頼んでもいないのに辛辣な答えを変える。

「お前の保護者の行動に賛成する。なぜなら、愚息の失態を記憶に刻んでしまつか、それとも家計のためにバーゲンで一つでも安く買い物をするかと言われれば、僕は間違いなく後者を選ぶだろう。君の保護者は実に有意義な時間の使い方を知っている」

「おいこら、失態って何だ。俺が何か恥をかかせるようなことをするとも思ってるのか？」

「思っているのではない。これは決定事項だ。これまでのことから言くと、君は過去数回の授業参観に於いて、授業参観だからと無駄に張り切り、誤った答えを堂々と黒板に書く、歌詞を間違えている

ことに気付かず一人歌い続ける、教科書の音読で『杜撰』を『しゃせん』と読む、一人目立とうと意気込んでまったく似合わない格好をしてきて親に恥をかかせる」「待つて！ もういいから、お願いだからやめて下さい！」

半分本気で泣きかけの桃園を、島村は蔑むかのように見下ろす。

「これはまだほんの一部だ。そして参観日の失敗など君の人生の失敗に比べれば微々たるものだ。話し始めれば一日では終わらない」

「話さなくていいから！ 一生活さなくてもいいから！ お願いだからやめて下さい。というか忘れて下さい！」

島村は桃園をいじることが趣味ではないかとうすうす感じていたことを、だんだんと確信に変えていく暁斗だった。

そんな中、教室中の他の誰とも違う空気をまとっている者がいた。常磐蒼衣だ。彼は頼杖をつき、ぼんやりと窓の外を見ていた。その顔には、どこか影がある。

「常磐、どうした？」

その様子が気になり、暁斗は声をかけた。

「うっん、何でもないよ」

そう言う蒼衣だが、やはり顔色は冴えない。どこか不安そうな顔だ。

その言葉をそのまま受け取れない暁斗だったが、もう一度口を開く前に始業の鐘がなってしまった。

蒼衣は視線を教壇に向け、そのまま口を閉ざしてしまった。暁斗は仕方なく、自分も身体を教壇の方へ向けた。

鐘の音と共に入ってきた担任は、参観日についての説明をしてから通常のショートホームルームを始める。

蒼衣の様子が気になっていたが、教師の話が終わる頃には忘れてしまった。

それが良かったのかどうかはわからない。しかし覚えていたところで何も変わらなかったことは確かだ。

予定は何も変わらぬままその時を迎える。役者の自覚もなく、た

だ静かに。

授業参観は一日の最後の授業に行われた。その方が保護者にとっても教師にとってもやりやすいからだ。

授業の後には保護者と担任の懇談会が予定されているのだが、参加するかどうかは保護者側の自由だ。もし一人も参加しなかったらどうするのだと意地悪な想像をしているのは、皆月暁斗の父・朔夜だった。

編集担当に急かされ（脅され）書き上げた原稿を担当に渡した後、家を出るまで眠り続けていた。それでも徹夜明けの頭はうまく機能せず、本日十数回目のあくびが出る。

朔夜自身、学生の頃こういった学校行事というものに無頓着だった。両親は忙しい人だったし、朔夜も学芸会や運動会といった行事を楽しめる性格でもなかった。生来そういった行事にのめり込める性格ではなかったらしく、参加はするが楽しもうという意欲は零に等しかった。だから両親に来てもらいたいと思わなかったのも、既に小学生の頃には両親の姿は学校にはなかった。両親も仕事に忙殺されていたので、息子の遠慮は正直ありがたかった。

だから朔夜の家にはそういった行事の写真が少ない。というより写真自体が少ない。家族旅行もほとんど行かなかったし、子どもの成長記録を残すことに情熱を燃やす保護者もいなかった。

中学に入る頃には不登校となっていた息子の写真など数えるほどしかなかった。何せ入学式や卒業式にも顔を見せなかった両親だ。もともと、朔夜自身もそれを望まなかったから恨み言などあるはずもない。

だから正直、両親のあの時の行動には驚いた。この二人にも親ら

しい感情があつたのか、それとも世間体を気にすることがあつたのか、それは結局のところわかつていない。物心ついたときから放任主義を通していた両親の思わぬ行動に、朔夜も驚いた。

だから付き合ってみることにした。たとえ理由は何であれ、この二人がおそらくこの先もすることはないだろう親らしいことだったから、人生に一度の親孝行と思い付き合うことにした。

結局、そのことが逆に彼らを苦しめることになったのではないかと今でも思う。口や態度にはほとんど表さなかった彼らだが、きっと周囲からいろいろと言われたのだろう。仕事にも支障が出たかもしれない。しかし彼らが息子を責めることは一度もなかった。

それは朔夜にとってありがたくもあり、申し訳もなかった。最低の親不孝かもしれない。だが彼らには何の非もない。あの時は誰もあなるとは考えてもいなかったのだから。朔夜自身もだ。

誰が悪いのかと言われれば自分だとはつきり言えるだろう。しかし彼を真つ向から非難してくれる人間はただ一人だけだった。あの人でさえ朔夜を責めることはなかった。恨み言の一つや二つ言ってもらった方が楽だったのかもしれない。いつそのこと、殺されるべきだったのかもしれない。きっと自分はその時それを受け入れただろう。なのに、あの人はそうしなかった。ただ罪の証を刻み込んで、自分は手の届かない場所へと行ってしまった。自分には謝罪も償いの機会も与えられなかったのだ。

朔夜が自分の息子の学校行事に必ず出席するのは、彼が暁斗の親であるという再認識でもあった。それだけは決して捨てはしないと心に誓った。

それがあの人に対する何になるのかはわからない。償いか、それとも断罪か、あの人は答えさえ残さなかった。

今日で何度目になるだろう参観日。それは今までと変わらず始まり、変わらず終わると思っていた。

この時までには――。

結論で言えば、参観日自体は予定通り、問題もなく終わった。

授業は数学と国語で、数学の時間は暁斗の顔が特に冴えなかったとか、それは特別なことでもなくて、例年通りの形で始まり、そして終わりを迎えた。

だから、本当の非日常はこれからだった。何かが終われば、次には何かの始まりがやって来る。しかし、暁斗も朔夜もこんなにも早く始まりがやってくるとは思っていなかった。そして、初めてその終わりが見えなかった。

授業が終わり、参観していた父兄達は懇談会に行く者もいれば、そのまま子供と一緒に帰る者もいた。参観日のホームルームなんていつもの半分もない。教師側も保護者の事を考え、早めに切り上げる。

暁斗はホームルームが終わると、すぐに父の姿を探した。学校という空間になじまない彼の父は、目立つことを気にしないがわざわざ目立とうともしない。要らぬ好奇心を向けられるよりは向けられない方が良く決まっている。

だから教室には入ってこない。廊下から見ているのが常だ。そしてこの日もやはり彼の姿は廊下にあった。それでも目立つことには変わりはないのだが……。

背が高く容姿も整っているし、何より他の父兄に比べ若い。珍しく髪には串が入れられているらしく、少し長めの髪は艶やかでさらさらしている。朔夜は参観日でもスーツを着てこない、というより堅苦しい格好を嫌うのでスーツを着ること自体稀だ。この日の服装も濃いめの灰色のワイシャツにネクタイもせず、上から紺色のコートを着ている。

決してきちつとした格好ではないにも関わらず、壁にもたればん

やりとしているその姿はファッション誌の一部分のように決まっていた、暁斗は本当に血が繋がってるのかと疑わずにはいられないのだった。

朔夜は息子に気付き軽く手を挙げた。

「おう、もう帰っていいのか？」

「うん。今日はこれで終わり。部活も休みだしな」

今日の夕食はどうしようかとか、そんな事を話しているとやはり帰宅する友人達が声を掛けてきた。

「暁斗、また明日な。おじさんもまた」

「それじゃあ皆月。朔夜さんも。そして一応別れを告げてやろう馬鹿菌。さらばだ、二度と顔を見せるな。というかこの世に別れを告げろ」

「もう装置を越えて菌そのもの！？　　というか永遠の別れかよ！」

この二人のコントは周囲に誰がいようとも行われるようだ。桃園の大声に馴れていない父兄が何事かとざわついているが、気付いていないのは本人だけのようだ。島村はわかっていてやっている確信犯だ。

「盆には線香をあげてやる。だから心配せずに旅立つといい」

「するって！　線香よりも優しさをちょうだい！」

二人はわめきながら、というより桃園が一方的にわめきながら帰って行くのを暁斗は見送った。

そろそろ自分たちも帰ろうかとしていた暁斗の前に、まだ友人とは言えるほど親しくはない転校生がやって来た。

「皆月君、今帰るところ？」

「ああ、常磐もこれから帰るところ？」

「うん、叔父さんが先生と話をしてるからそれが終わったら」

「そっか。そうだ、これ俺の父親」

「これとは何だ。父親をこれ呼ばわりするな」

息子の紹介に不満を見せていた朔夜だが、蒼衣の顔を見たとき、息を呑んだ。

「親父、こいつがこの間言ってた転校生。常磐蒼衣っていうんだ。驚いたか？親父に似てるだろ？」

暁斗の紹介を訊くと、朔夜の表情は凍り付いた。

「常磐……蒼衣？」

その名前が朔夜の頭の中を何度も重複した。よく知っている名前。あの人と同じ名字。それが意味するところは――。

父の様子を変に感じた暁斗だが、朔夜は隣にいる息子の方を見てはいなかった。その視線は目の前にいる転校生ただ一人に向けられていた。

一方の蒼衣も朔夜の顔を見つめ返した。

しばらくの沈黙を破り、蒼衣が口を開いた。

「初めまして、常磐蒼衣です。叔父から話は聞いてます。正直会ったら何を話そうか迷ってましたが、結局何を言ったらいいのかわかりませんでした。でも、こうして会ってみて、あの話が叔父の作り話ではないことがはつきりました」

疑問符をいくつも頭の上に並べている暁斗を素通りして、二人の間には立ちきれぬ何かがあった。

「君は――」

「蒼衣、先に会うなと言っただろう」

朔夜が何かを言おうとしたとき、一人の出現によって言葉の続きは断ち切られた。

そこに現れたのは一人の男だった。朔夜と同様、この場には似つかわしくない若い男性。朔夜とは違いベージュのスーツを着た身なりの良い男だった。年は朔夜と同じか少し上ぐらいだろう。この場にいるのだから誰かの父兄ということだが、父親にしては若すぎる。誰かの年の離れた兄なのだろうかと暁斗は考えたが、どうやらそれは違うようだ。

「叔父さん」

その男をそう呼んだのは蒼衣だった。

なるほど叔父か、それなら若いのも納得だと思っていた暁斗だっ

たが、隣に立つ彼の父はそんなのんきな考えを出すことなどではなかった。

そこにいたのは、彼の顔見知りだった。しかし決して会いたくとは思わない人物。どこかあの人に似た面影を持つ彼。二度と会うことはないと思っていたが、こんな場所で会うとは思わなかった。

いや、それよりも、この男が叔父だというのなら、やはりこの子は――。

「久しぶりだな。もう十四年ぶりになるだろうか」

困惑する朔夜を前に、男は満足そうな笑みで言った。

「お前が姉さんを殺して以来か」

この場には似つかわしくない単語が男の口から飛び出た。

――『殺した』？

暁斗の中をその単語が飛び交う。父が誰を殺したと？

混乱する暁斗を置き去りにし、男はさらに言う。

「蒼衣、この男がお前たちの母親を殺した奴だ」

何を言っているのか意味がわからない。暁斗はその場でただ一人、違う世界に迷い込んだような錯覚をした。

男の言葉が外国語のように伝わらない。しかし呪いのように脳に刻まれていく。

これ以上は聞きたくない。

しかし暁斗の心中など知らぬかのように、呪詛は続いた。

「自分そっくりの息子に会えた気分はどうだ？」

『お前だけは赦さない』

あの日と同じ憎悪にまみれた顔が、そこにあった。まるであの日に戻ったかのように――。

第四話 彼者誰

日常生活を送る中で、『死』に直面することは意外に少ない。それは身内の死だったり、またはペットなどの動物・虫などだったりする。

しかし人の『死』というものは身近にありそうでなかったりする。葬式に行ったこともないという学生がいても決しておかしくない。暁斗自身、葬式や通夜に行ったことはなかったし、そこで具体的にどういったことが行われているかは知らない。

彼にとって身近な『死』は母のことだが、自分が生まれる前に死んだ母親のために泣いたことはなく、またそれを『死』と感じたことはなかった。失われる命の尊さを知らないわけではない。しかしその重みを感じたことはない。自分はまだ失ったことはない。

失ったことのない者が失った者に慰めの言葉を掛けても所詮は他人事だ。どんなに理解しようとも理解しきれることではない。

そんな中、『殺す』とはただの『死』とは違う。それは奪われる行為で、肉体の機能が停止することに変わりはないが、受け止める側の気持ちの有り様は違う。

奪われたら苦しい、憎い。憎悪と憤怒が心を駆け巡る。

しかし復讐のために人を殺すという現象は、フィクションの世界でしか見たことがない。実際に人が人を殺すのはもっと単純だったりつまらない理由だったりする。

だから、目の前の男がまとうその空気が復讐のための憎悪だと、最初は気付かなかった。そんなものは現実には滅多に起こらない、自分とは関わりのない世界だと思っていたからだ。

しかし暁斗が信じていた世界はもろくも崩れ去った。『加害者』

という父をもつことによって――。

「自分そっくりの息子に会えた気分はどうだ？」

彼がそう言った時、長い間間違えてはまっていたパズルのピースが転げ落ち、正しいピースがはまる音がした。不思議にも、朔夜の心はそれほど乱れてはいなかった。

あの少年の顔を見たときは、これはまた夢を見ているのかと思った。

少年の姿はかつての自分に不気味なほど似ていた。一番無様で愚かだった頃の自分だ。昔の夢を見ているのかと本気で思ったほどだ。しかし今自分はここにいる。大人になった自分がいる。そして少年の隣にはあの時よりも成長した彼がいる。

これは夢ではない。現実だ。そして、策略という名の計算式の答えを掴んだ。それが誰によって創り出されたものなのかもだ。

今朔夜が冷静でいられるのは彼が大人になったからだ。そして長い時が流れたからだ。良くも悪くも彼は大人になり、かつての現在は過去となった。

蒼衣とその叔父は不思議にもその日はそれ以上何もせずに戻って行った。その場に取り残された親子は、呆然とその後ろ姿を見送るしかなかった。

朔夜が息子に声を掛けたのは二人の姿が見えなくなってからだ。

「暁斗、俺は今日用事ができたから、お前先に帰ってろ。晩飯も一人で食べる。俺の分は用意しなくていい」

突然そのようなことを言われた暁斗は慌てた。

「え、ちよつと待てよ。さっきの人誰だよ。それに常磐は――」

「その答えは明日にしてくれ。今日は俺も考えをまとめておきたいんだ」

そう暁斗の言葉を遮ると、朔夜は息子に背を向け歩き出した。

「ちよつ、親父！」

止めようとする暁斗に、朔夜はただ一つだけ言い残した。

「俺は、お前が思ってるほど完璧な人間じゃないんだ」

それだけを残し、朔夜はその場を去っていった。

置いていかれた暁斗はただ混乱するだけだ。

「何だよ、それ。俺はどうすればいいんだよ」

自分が当事者なのか部外者なのかすらわからない。自分を置き去りにして進んでいく話。グループ活動の時、皆がそれぞれの役割で進めていく中、自分が何をしたらよいかわからず、ぼうつと立っているしかできなかった時のことを思い出した。あの時と同じく、自分がこれからどうすればよいのか、何をすべきなのがわからない。一体何が起きているのかすらわからなかった。

そして父が何を考えているのかもわからなかった。何も教えてくれない父は不可解な言葉だけを残してどこかへ行ってしまった。

『俺は、お前が思ってるほど完璧な人間じゃないんだ』

暁斗自身、自分の父を完璧な人間と思っていたわけではない。しかしほとんどの事柄において自分以上の結果を出せる父を、駄目な人間だと思ったことはなかった。

その口から発せられる言葉はすべてが正しく思えたし、できないことはないのではとさえ思った。たとえ性格に難があっても、決して無様な失敗は犯さないと考えていた。

しかしそれは父親となった朔夜の姿であって、昔の朔夜を知っているわけではない。暁斗が生まれたときには、当然のごとく朔夜は父親となっていた。若かりし頃に過ちがあってもおかしくはない。

だが現在の朔夜を見ると、過去にも失敗はないのではと思えるほ

ど、暁斗の目には完璧な父が映っていたのだ。

結局暁斗は父の言うとおりに帰ることしかできなかった。そして朔夜は日付が変わっても帰ってくることはなかった。不安と混乱を抱えたまま眠れるほど暁斗は図太くなかったが、その心の底で父への見解が間違っていたのではないかという不安が渦巻いていた。父への信頼と不信。暁斗は眠れぬまま朝を迎えることになった。

一方の朔夜は日が暮れるまで町中を歩き回り、会社勤めの人間が言えに帰宅する頃一つのバーに入っていた。

朔夜が入った頃にはバーはまだほとんど客がいない状態だったが、しばらくすると仕事を終えたサラリーマンやOLが入ってくるようになった。

朔夜は一人カウンターでちびちびと酒を飲んでいた。その姿は決してうまそうに飲む様子ではなかった。ただ、本当に時間を潰すためだけに飲むような、そんな様子だった。

時々若い女性が誘いに来るが、そのすべてを断った。昔から恋愛や性欲には疎かったし、『父親』になってからはそうだったこともまったく関わらなくなった。

それは一生分の恋を使い果たしたとかいう恋愛小説じみたセリフではないが、あの人以上に愛せる相手がいなかったというのも事実だ。未だにあの頃の夢を見ては若かりし頃の想いを繰り返している。しかしそれは夢の中の話だ。現実までそうかと言われるとそうではないと答えるだろう。過去は所詮夢の中に消えてゆくものだ。どんなに強い想いも、記憶も、まるで色あせるかのように遠いものとなっていく。

そのことが哀しいのか、辛いのかはわからない。今でもあの時の情熱は思い出せるというのに――。

しばらく朔夜がそのようなことを考えていると、ようやく待ち人が現れた。

決して高級ではないが清潔でセンスのよいスーツは本人の性格を表している。朔夜がひっくり返ってもまねできないことだ。何せ彼はワイシャツにアイロンをかけずに着ても平気な男だ。会社勤めは一生無理なようだ。

待ち人は相手を待たせたことに対し詫びる様子もなかった。

「おせえぞ」

「こつちが遅いのではなくそつちが早すぎるんだ。日が暮れたとたん酒か？ 子供が大きくなったからって家庭をないがしろにする反抗期が大変だぞ」

そう言つて朔夜の隣に座った。

彼は東城秀一。都内の会社に勤めるサラリーマンである。彼は朔夜の友人で、彼が中学生だった頃からのつきあいである。そのつきあいは十数年、およそ半生のつきあいとなる。

そして彼の過去の事情を知る数少ない人間の一人でもある。

突然の呼び出しを食らった彼だが、朔夜の性格を熟知しており、朔夜がもつとも信頼している人物である。

「それで？ 何の用があつてこんな早くから呼び出したんだ？ まさか酒につきあわせるために勤務時間に電話してきたわけではないだろ？」

朔夜がそんな理由でわざわざ勤務時間に電話してくることはないしてくるのならそれなりの理由があるはずである。常より幾分か雰囲気暗い友人に何かがあつたことを、東城は会つてすぐに気付いていた。

朔夜はグラスに残っていた酒をあおり、バーテンダーに再度酒を注文した。

「今日、『先生』の弟に会つた」

朔夜がようやく口に出した言葉に、東城は驚きを隠せなかった。

「夕夏さんの？ どうして今頃に」

「どうして今頃なのかは知らねえ。もしかしたら時をあわしてるのかもな。俺が『先生』に会ったのは十四歳の時。ちょうど暁斗も同じ歳だ」

もしそうなら悪趣味なことこの上ない。

「だからって、今更昔の恨みでも晴らそうっていつのか？ あの件はお前だけの責任でもないだろ」

「俺はそう思っていない。向こうもな」

「だからって…」

「それにな、会ったのはそいつだけじゃないんだよ」

朔夜は新たに入れられた酒を半分ほど飲んだ。

「そいつは暁斗のクラスメイトの叔父なんだと。さらにその甥は誰かさんのガキの頃にうり二つときている」

「おい、それってまさか…」

「暁斗はそれほど似てなかったが、似るもんなんだな、親子ってのは」

東城は席に座ってすぐに頼んだ酒にも手を付けられず呆然としていた。

そして落ち着いた頃には、十五年前の悪夢が繰り返されるのではと危惧していた。

東城はあの頃の朔夜を知っている。あの人を失った直後の朔夜はひどい有様だった。そのうち後を追ってしまうのではないかと思い、見張り続けた。結局朔夜が求めたのはそんなものではなかったが、死を選ぼうとしたことは変わらない。いや、ある意味死よりも質が悪かった。

朔夜には死という終わりを選ぶことができなかった。許されていなかった。だからこそあそこまでひどい状態になったのだろ。いつそのこと死ねたら楽になれるのではないかと東城自身、考えたことが一度ではなかった。しかし彼にそれを勧めることができるはず

もなく、また東城自身朔夜に死んで欲しくないという思いがあった。今となつてはそれが良かったのかどうかはわからない。しかしそれを切り抜けたからこそ、今がある。苦難の末手に入れた今を、東城は失いたくなかった。もう一度友をあの地獄に投げ出したくなかった。

眉間に皺を寄せている東城に対し、朔夜はその心中を察したかのようだった。

「そんなに心配するな秀。あの時みたいに自暴自棄にはならねえよ」
そう言う朔夜は東城が思った以上に落ち着いていた。それでも心中は穏やかではないだろうが、確かに昔のような危うさは感じられなかった。

「今悩んでるのは暁斗にどういうふうに説明したらいいのかと、もう一人とどうやって話をつけるか。それにあいつがこれから何をしてくれるかだ」

「そのもう一人とは話せたのか？」

「いや、話す暇はほとんどなかった。だけど最初の挨拶を聞いている限りじゃ、あいつにいろいろと言われてきたようだった」

正直、朔夜はそれが一番心配だった。

あの男が蒼衣に話した過去は嘘偽りではない。しかし私情の入った説明は真実を正しく映せないかもしれない。それに彼があの子にどんな風に接してきたかが気がかりだ。

自分の最愛の姉と、もつとも憎む男の子供。せめて似ていなければ別の可能性を考えられたかもしれないが、あの顔では一目瞭然だ。彼は、憎い男の顔をした甥と、どんな気持ちで暮らしてきたのだろうか。

もう一度会いたいと思った。今更親子らしい会話ができるとは思っていないし、憎まれても仕方がないと思っている。しかしあの男の自分への復讐に巻き込まれる人生だけは歩んで欲しくない。

父親なのだから子供に会いたいと思うのは当然だと、そんなふうに言うのは何も知らない人間だけだ。子が親を憎むことも、親が子

を疎ましく思うことも現実存在する。

昔はあの人には殺されてもかまわないと思っていたが、今はあの子達にこそ殺す権利があるのではと思う。

朔夜自身は家族の情などに縁がなかった方なので、会ったことのない親の敵よりは今の自分と家族を選ぶ。しかしあの子達がそうかはわからない。そこはあの子達の自由だ。たとえその結果がどうなっても、たとえそこに自分がいなくても、あの子達がそれに満足するのならどんな結果も受け入れよう。しかしそれに縛られては欲しくない。過去のために未来や今を失うようなことはして欲しくない。選んで欲しい。自分が後悔しない道を。かつての自分と同じ過ちを繰り返さないで欲しい。そしてその過去を受け入れて欲しい。たとえ縛られなくても、なかったことにはしないでくれ。過去を捨てないでくれ。

俺を許さなくてもいい。殺してくれてもいい。だけどそのことを忘れないでくれ。

それが朔夜の願いだ。

「お前今度こそ刺されるかもな」

心配する友人の言葉も、何の力もない。

「それでもいいさ。あいつらがそれで納得するのならな」

本当に殺されてしまうのではないかという不安が東城にはあった。十五年前もそうだったからだ。しかし殺されず、その憎悪の晴らし方がこれでは、巻き込まれた方も大変だ。血を継いだとはいえ、あの時生まれていなかったあの子達に背負わせるには、自分たちの過去は重すぎる。

グラスの氷が音を立てて崩れた。

「今までが夢のようなことだ。だったら、今まで夢を見せてくれたことに感謝しなくちゃな」

それは、誰への感謝なのか。

東城は訊くことができなかった。

気付かないうちに終わりを迎えていた夢。帰ってきた残酷な現実。

その結末に待つものは――。

第四話 彼者誰（後書き）

彼者誰とは黄昏の逆。朝日が昇る頃を指します。

「彼の者は誰か」という言葉から付けられ、まだ暗くて眼の前にいるのが誰なのかわからないという意味です。

第五話 払暁

朔夜が家に帰宅したのは太陽がとつと昔に昇った昼前だった。結局バーを出た後東城の家でさらに酒を飲み、二日酔いになされたが、家主に起こされ、ようやく帰宅したのだ。

東城が心配して一緒に行くと言ってくれたが、とりあえずは二人で話したいと言って断った。

今日は休日なので家にいると思っていた暁斗。しかし家に入ってみると影も形もなかった。

部活かと思ったがカレンダーには何の予定も書かれていない。

自分に愛想を尽かして出て行ったのだろうか。それにしても話を聞いてからにすればいいものを。もしかしたらあちら側が何かをしてきたのかもしれない。そんな不安が頭をよぎったが、結局行き先もわからないので、おとなしく帰りを待つしかなかった。

ちなみに携帯は電源が入っていないらしく、通じなかった。

さて、どうするか。

事態は決して樂觀できるものではないにも関わらず、朔夜の態度は意外にも平然としたものだった。慌てても無駄だからかもしれない。

とにかく今は息子の帰りを待つだけ。

たとえばその時、父にどのような眼を向けようとも。

暁斗はおそらく今までの人生でもっとも緊張している。原因は今の前にいる人物のためだ。

今暁斗がいるのは近所の喫茶店。そして目の前の席に座っているのはクラスメイトの常磐蒼衣だ。

今朝、一睡もできないまま朝を迎えた暁斗の元を訪ねてきた蒼衣は、話があると言って暁斗を連れ出した。わざわざ外に出たのは朔夜に会わないためだろう。

暁斗はモーニングセットを頼んだが、ほとんど味などわからなかった。蒼衣は話を始めるのは食べ終わってからでいいと言って、珈琲を飲みながら暁斗が食べ終わるのを待っている。暁斗は目の前の食事を口に運ぶが、食べた気にはならなかった。

蒼衣は暁斗が食べ終わるまで一言もしゃべらなかった。

食事が終わり、蒼衣が頼んだ珈琲のおかわりと、暁斗が頼んだコーラが運ばれてくると、ようやく話は始まった。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。取って喰ったりしないんだから。そう言われても、一体何の話がされるかも分からず、暁斗の身体はガチガチに固まっていた。

そんな暁斗を、困った様子で見ている。

「先に言っておくけど、別に僕は君や君の父親に何かしたいわけじゃないんだ。強いて言うなら話がしたかった。それだけなんだ」

だから気を楽しにしてと言う蒼衣の言葉に嘘はないと感じ、暁斗はほんの少しだけ力を抜いた。

珈琲に口を付ける常磐につられ、暁斗はコーラを飲む。ストローを通し、コーラが一気に口に送り込まれた。

「昨日のことだけだ」

来た。暁斗は自身も気になっていて、でも訊けなかった話題に耳を傾ける。

「叔父がいきなり失礼なことを言ってごめん。でも、叔父さんはあ

の時のために僕を育てていたようなものだから」

「どういう意味？」

暁斗はここに来て初めて自分から口を開いた。

「昨日の会話で叔父さんが言っていたけど、君の父親は僕の父親でもある。つまり、君と僕は兄弟なんだ」

暁斗の頭を衝撃が走った。昨日の会話にも確かにそんなことがあったが、それでもそれをいきなり信じられるはずもなく、むしろ父が誰かを殺したという言葉の方が頭に残っていた。

だけど、本当に目をそらしたかったのはそちらの方だったのかも知らない。

聞きたくなかった。無かったことにしたかった。

父に自分以外に子供がいたこと。その子供を置いていったこと。蒼衣が自分の兄弟だということ。

小学生の頃、テレビで我が子を捨てる親を議題にした番組を見たことがある。捨てられた子供のこと、捨てた親のこと。

その時はどんな理由があろうとも、子供を捨てる親は最低だと思った。捨てるのなら、なぜ産んだのか。生まれてこなかった方がよかったと子供に思われる親とは何だと思った。

それを言った時、朔夜は少し複雑そうな顔をしていたことを覚えている。だけど、

『親になりたくて親になったわけじゃない人間もいるんだ』

そう言っていた。

『でも、生まれてくる子供には親は親でしかない。親に捨てられることは、生まれてきたことを否定されることなのかもな』

生まれてきた子供が受けるはずである親の庇護。それがなければ、一体何のために生まれてきたのか。子供は生まれる先を選べない。親を選べない。愛する気がないのなら、育てる気がないのなら、なぜ産んだのか。それすら問う暇もなく捨てられる子供達。彼らに何の非があるというのだろうか。

幼かった暁斗には捨てられる子供の気持ちも、捨てる親の気持ちもわからなかったし、結局は他人事だった。

ただ、朔夜のその時の表情だけが頭に焼き付いていた。どこか悲しそうな、しかしここにはない何かを見ているような目をしていた。

あの瞳には、一体何が映っていたのだろうか――。

あの時他人事だった出来事が、今日の前にある。決して他人事ではない、しかし当事者でもない。

捨てられた彼と、捨てられなかった自分。その差は何だろうか。なぜ自分は育てられ、彼は捨てられたのか。

決して自分たちでは出すことが出来ない答。答えられるのはただ一人だけ――。

「先に言っておくけど、僕は君や君の父親を恨んだりしていない。ただ、叔父の言うとおり会ったのは訊きたかったことがあったからだ」

蒼衣の瞳は暁斗のみを映している。周囲の話し声も耳には届かない。二人のみの世界がそこにあった。

「訊きたい事って？」

暁斗はどんな質問が出てくるのか緊張しつつも相手の話を促した。

蒼衣は二杯目の珈琲を口に流し込んだ。

「君の父親はどんな人？」

意外な質問だった。暁斗が想像していたどんな質問とも違っていった。いや、正直予測も出来なかった。恵まれた自分と捨てられた彼ではその心境も何もかも違う。そんな彼がどんなことを考えているかなんて、簡単に考えられるものではなかった。

恨み言を言われてもおかしくない状況だ。しかし蒼衣は恨んでは

いないと言つ。ならば何の話をしに来たのかと身構えていたところに来たのは、あまりにも素朴で、しかしあまりにも意外な質問だった。

暁斗はしばし頭を落ち着かせ、そして慎重に訊いた。

「そんなことでいいの？　　というかあの叔父さんに聞いてたんじゃなかったのか？」

暁斗がそう言つと、蒼衣は少し困つたような顔をした。

「聞いていたというより聞かされていたというのが正確。叔父さんからは子供の時から君の父親への恨み言を言い聞かせてきた。僕の母親を殺したのはあいつだと。あいつはお前の兄弟を連れて行き、お前を捨てていったんだつて。昔はそれをそのまま信じていたよ。父親を恨んだりもした。でも、成長するに従つて、それが本当なのか疑問に思うようになってきたんだ」

珈琲の水面を覗くとそこには自分の顔があつた。家の誰にも似ていない、会つたこともない父親によく似た顔。血のつながりを感じさせるもの。

「叔父さんはいつも僕を通して誰かを見ていた。最愛の姉ともつとも憎い男。未婚の姉が産んだ僕は親戚中でもかなり微妙な立場だった。一族として認めないと言う人もいれば、腫れ物に触るような態度の人もいた。そんな中、純粹に愛情を注いでくれたのは叔父だけだった。でも、時々僕をひどく怖い顔で見ることがあつた」

愛情を与えられるのは最愛の人の血を引いているから。でもその眼に自分が映ることはない。常にその眼には自分の父か母が映っていた。

復讐の為に自分を育ててきた叔父。その憎しみに染まつた瞳が、言葉が、本当に真実を映しているのか。

「そうはつきりと思うようになったのは母さんの日記を見つけてからだ」

「日記？」

暁斗の前には氷が溶け、薄くなったコーラがあるが、暁斗はのど

の渴きも忘れて蒼衣の話に聞き入っていた。

「母さんの部屋にあったんだ。母さんが死んでからその部屋は叔父さん以外誰も入れなかった。けどある日、叔父さんの目を盗んで部屋に入っただ」

初めて入るその部屋は、かつての主の趣味を表したもので、誰にも使われなくなった今も変わらず存在していた。まるで今も主を待っているかのように。

亡くなった時、母はまだ大学生だったという。

シンプルなデザインの家具や壁紙は派手すぎず地味すぎず、淡い色を多く使った落ち着いた部屋だった。本棚の半分には講義のテキストやノートが並び、もう半分にはハードカバーや文庫の文学が並んでいた。壁に掛けられたままのカレンダーは何年も前のもので、もうこれをめくる人間がいなかったことを表していた。

棚に飾られた数点のぬいぐるみ、女らしさを表す壁鏡、そして机に並べられた写真立て。どれも何年も前からそこにあるにも関わらず、埃一つ付いていなかった。

きつと叔父が一人で掃除していたのだろう。叔父の亡き人への愛情が感じられた。

部屋に入った蒼衣は、机の角に並べられた写真立てに目を向けた。写真立ては全部で四つ。一つは四人の人間が映っている。その中には幼い頃の叔父も映っていた。これは家族写真だろう。二つ目は桜並木の下で撮られたもの。母と数人の少女が映っている。母はまだ制服姿だ。これはきつと卒業式に友人と一緒に撮ったものだろう。三つ目は先の二つよりも年をとった母。おそらく亡くなる一年か二年ほど前だろう。一緒に映っているのは一人の男性だ。落ち着いた

雰囲気の男性は母と同じか少し年上に見えた。母はその男性の腕に捕まっていた。とても幸せそうな顔だった。

一目で母が好きな人なんだとわかった。そしてこの男性も母を愛しているのだとも。しかしそこに映る男性は自分とはまったく似てもない。自分の父親は自分によく似ていると聞いている。ならばこの男性は自分の父親ではない。

しかし驚きはなかった。なぜなら、叔父から聞いていたからだ。母には本当に愛した人がいたと。そしてその人は自分の父親ではないと。

母がなぜ愛した相手ではなく、別の男の子供を産んだかはわからない。叔父もそれだけは教えてくれなかった。本当は知らないのかもしれない。でも、父のせいで母は死んだのだと聞かされていた。なら、母が死んだのは自分たちを産んだ為なのだろうか。

最後の写真は先程のものと同じく母とその恋人が映っていた。しかし先程と違うのは、もう一人の人間が映っていることだ。

母と男性の間に立っているその人物は、まだ少年と呼んでいいもので、どこかつまらなさそうな眼をしていた。中学生ぐらいだと思う。成長しきっていない、まだ幼さの残るその顔に、見覚えがあった。

ふと壁に掛けられた鏡を見た。そこには写真に写っている少年によく似た顔が映っている。

すぐにわかった。この人が自分の父親なんだと。よく似た顔は血のつながりを示すには十分なもので、他人のそら似とは言えなかった。

写真立てから写真を撮りだし、撮影された日にちを調べた。およそ母が死ぬ一年ほど前。自分が生まれたのは母が死ぬ半年ほど前。つまりここに映っている父らしき人も、中学生か高校生だったことが伺える。

叔父からは父への恨み言を聞かされていても、どんな人間だったのかは教えられなかった。その人物の性格・容姿・年齢・職業はお

るか、名前すらわからない。普通なら知っていて当たり前である父のことを何も知らない。そして誰も教えてくれなかった。ただ母を殺したという事実だけが伝えられてきた。

他に何か父を示すものがないかと部屋の中を探して廻った。もちろん後で叔父に気付かれないように痕跡を残さないことに注意しながら。

平素なら母親とはいえ他人、それも異性の部屋を詮索することに抵抗を感じただろう。しかしこの時は新たな発見への好奇心と探求心が心を占めていた。

初めて見る母の部屋はあくまで若い女性の部屋という印象があり、母の部屋という雰囲気はなかった。それも当然と言えば当然のことだ。母が自分を妊娠したのは大学生の頃だという。突然の妊娠に周囲が皆驚いた。本人も最初から若くして母となる気はなかったのかもしれない。まだ成人を迎えたばかりの母は、『母』であるよりも『女』であつても不思議ではない。

だからこそ、母が『母』となったことが不思議だ。結局母は周囲にその理由を話さないまま死んだらしい。周囲の猛反対を押し切り、恋人でもない男の子供を産むその理由は今もなお明かされていない。もしかしたら会ったことのない父が知っているのかもしれないと思った。知りたいと思つた。自分が生まれてきた理由。置いていかれた理由。

何も知らされてこなかった。だから知りたい。他人の口からではなく、当人の口から説明して欲しい。

たとえばその先にどんな事実があるうとも――。

蒼衣の話はそこでいったん切られた。

話疲れたのか蒼衣はほとんど冷めていた珈琲を一気に飲み干した。暁斗は頭の中で今までの話を繰り返し再生していた。

まず驚いたのが今まで知らなかった母のこと。父も若すぎるが、母も若かったこと。自分達を産んだ理由を周囲に語らなかったこと。そして母の実家と父の確執のこと。幼い頃からなぜ母の仏壇も何もないのかと不思議に思っていた。父に訊くと、母とは籍を入れていないからだと言う。

父はいつかわからない命日にすら墓参りをしている様子はなかった。もちろん盆もだ。最初は自分に気付かれないうちに行っているのかと思ったが、どうもその様子はない。母の実家が父を嫌い、墓参りすら許していないのならその意味もわかる。

最後に母の恋人について。暁斗は今まではほとんど母のことを周囲から聞いたことはない。もちろん恋人のこともだ。

たとえ籍を入れてなくても、普通の夫婦のように両親は愛し合っていたのだと勝手に思い込んでいた。自分が望まれずに産まれてきたなど考えたこともなかった。

そのため、その事実が暁斗に少なからずショックを与えていた。そんな様子の暁斗の心中を悟ったのか、蒼衣はしばらく話しかけなかった。からになったカップとグラスを店員が持つて行くまで二人の間には沈黙が続いた。

何分経ったのか暁斗にはわからない。しかし話が中断されてしばらく時間が流れたことはわかった。

とりあえずショックによって揺れていた心を静め、暁斗は目の前の蒼衣に話の続きを促した。

蒼衣はそれを了承すると、中断していた話を再開した。

まるで初めて読む本の前編を読んだ後、後編を読み始めるときのような緊張感と期待、そして不安が暁斗の中に渦巻いていた。

その日記帳は机の引き出しの奥に隠すように入れられていた。始まりの日付は母が大学に入学する直前。ちょうど大学入学を機に始めた日記のようだ。

ばらばらとめくりながら内容を見ていく。そのほとんどは若い女性の記事としては珍しくもない、日常生活の繰り返しと些細な出来事の記事だった。学校での講義、休日に友達を遊びに行ったこと、両親や弟との会話など、何かに喜び、怒り、悲しみ、退屈した日々の繰り返し。自分の求めるものはなかった。

ノートの四分の一ほどを進んだ頃、その名前が目飛び込んできた。

『田上誠司』

今までには記されたことのないその名前が気になった。そしてその名が刻まれたその日から、日記の内容に変化が生まれた。

今まで家庭や学校生活について書かれていた日記は、『田上誠司』の名がほとんど埋め尽くしていく。一日の半分以上をその人物についてで占められている。

今日は会えた、今日は会えなかった。彼に対しての感情や行動、彼の言動に対する喜びや悲しみ。彼女の中で彼が占める範囲が広がっていくことが感じられた。

この人が好きなんだ。一目で分かるほど、彼への想いが日記帳に溢れていた。何だか他人のラブレターを盗み見しているような気分になった。そもそも母親とはいえ他人の日記を見ることが良いことなわけではない。

しかしこの中に今まで知りたかった真実がある気がする。だから途中でやめるわけにはいかなかった。

『田上誠司』という人物は母の通う大学付属の大学院の院生のようだ。理学部の学生で、かつて母が所属するサークルに所属しており、OBとして指導に行った先で母と知り合っただけらしい。

優しく、穏やかで、運動は得意ではないが頭が良く、努力家で指導もわかりやすい。

母はいわゆる一目惚れという奴で、一度優しく笑いかけられたその顔が好きになったのだと書かれていた。年上であることをおごることもなく、誰にでも平等に接した。サークルの活動以外にも試験勉強で分らないところがあれば嫌がることなく教えてくれた。

彼に会うために大学へ行っていたと言ってもおかしくないと母は記していた。サークル以外でも彼に会うために何かと理由を付けたり、友達に協力してもらったり、その姿は『母』ではなくただの『女の子』のものであった。

日記の中の母は『母』ではなく一人の恋する女の子だった。そんな母がなぜ『母』となったのか。なぜ自分たちを産んだのか。答はまだ先にあるようだ。

母と『田上誠司』が付き合うようになったのは母が大学に入学して一年目を終えようとしていた頃だ。バレンタインにチョコを渡す勇気がなくチャンス逃してしまった彼女は、三月初めにある彼の誕生日にプレゼントを渡すと共に告白をしたらしい。意外にも彼は一発でOKを出したらしい。ちなみにその時のプレゼントというのが何時間も店を周り、悩みに悩んで買ったシルバーの腕時計らしいが、そのあたりの苦労はまったくくないようだ。あるのは告白を受けいれてもらえた溢れんばかりの喜びだけだ。

こうして母は最愛の人を得たわけだが、ここまで父らしき人は一度も登場していない。まだ父の名すらわからないままだ。

ここから先にあるのはこれ以上の幸せか、これまでの幸せを打ち砕くほどの悲劇か。おそらく後者であることを知りながらも、ページをめくる。でなければ、今自分たちはここにいないはずはないのだから――。

第六話 宵

ノートに書き込まれた文字も、。や×が付けられた問題も、そして今日の前にいる血縁さえも、あの頃のあの人をすべて思い出させるには不十分なものだ。

なぜこの男が今ここにいいのか分からない。確か自分は自宅で息子の帰りを待つていたはずだが。

茶など出すはずもない。招かれざる客に出すものなどこの家にはない。

男——常盤要というらしい——は朔夜の都合などお構いなしに上がり込んできたのだが、勝手にリビングのソファに座り、ここに来てから数分、何も話さない。腕を組み、足も組み、偉そうなその姿は決して友好的ではない。

朔夜自身、彼の下の名前などほとんど覚えていなかった。事務的に渡された名刺を見て思い出した——というより覚えようとしなかったことを改めて覚えた——だけで、名前を知ったところでこれから先名前で呼び合うことなどまずないのだろうなとぼんやり考えた。朔夜はとつと珈琲を自分の分だけ入れると、要の正面に同じようにふんぞり返って座った。

ズズツと朔夜が珈琲をすする音が部屋に響き、沈黙の時間が流れ続けた。

もちろん二人とも再会を喜び合う気はないし、和解のつもりもない。さらに言えば、このとき別の場所で二人の兄弟が話をしていることを知るよしもない。

朔夜は自分から話を切り出すつもりはなく、他にすることもないので目の前にいる男の顔を眺めた。

常磐要。確か朔夜より一つか二つ年上だったはずだ。前に会ったときは高校生だった。顔の造形は一緒に暮らす甥には似ておらず、どちらかというともう一人の甥に少し似ているかもしれない。十数年、一緒に暮らしながら一度も気付くことはなかったことだ。無理もないかもしれない。

あの頃視界に入るのはあの人だけで、その周囲にいた人間のことなど、さして気にしていなかった。彼女の血縁だから、知人だからその存在を覚えていた。それも名前すらろくに覚えていないものはあったけど。

たとえ覚えていたとしても何も変わらなかっただろう。彼のこと覚えてるのはおぼろげな顔とあの言葉だけ。

『お前だけは赦さない』

憎悪に染まった眼とあの言葉が今も記憶に刻まれている。その報復が来ることをまったく考えなかったわけではないが、今頃になってやって来るとは思わなかった。まさかあんな手段で来るとは思わなかった。

それだけがひどく不快だ。

沈黙が破られたのは既に二人が面と向かい座り、十数分が経った頃だ。

「久しぶり、というのはこないだしたところだな。今の気分はどうだ？」

「最悪だ」

「それは良かった」

どこか喜んでいそうな要と、反対に不機嫌そうな朔夜。相容れることはない二人には、理解し合うための言葉もない。お互い口に出すのは不満と嫌味。埋めようがないほど深く幅広い溝が二人の間に広がっていた。

「そう言ってもらえるなら、わざわざ来たかいがあったというものだ」

こいつ、こんな性格だったっけ。

相手の性格などほとんど覚えていないが、ここまで嫌な奴だっただろうか。というよりこんなにしやべる奴だっただろうか。以前会ったときは、あの人の傍でずっと黙っているだけの無口な奴だったと思うが。

十数年の年月でここまでゆがんでしまったのか。それともあの日狂ってしまったのか。どちらにせよ、あの頃の彼には戻れないかもしれない。

正直会話をするどころか顔を見るだけでも不快な気分になる彼を門前払いもせず家に入れたのはもちろん理由がある。

嫌な役回りだ。だけど他の誰にも任せられない。

これは俺の役目だ。

「どうでもいいお喋りはその辺にして、本題に入れ。だいたい予想はついているがな。ただし、それを聞き終わったら俺の話も聞いてもらっぞ」

朔夜のわびる様子もない態度に、要は気分を害した。

「ふん、今更言い訳でもする気か？ まあいい。そう言えばあの子供はどうした？」

「あいつに用があったのならご愁傷様だな。今出かけている」

「愛想をついて出て行ったんじゃないのか？ 他にやるところがないのなら引き取ってやってもいいぞ」

まるで子犬を里子に出すような言いぐさだ。あいにくたとえあいっが出ていくと言い出しても、その行き先にこいつのところを推薦

する気はないが。

「不幸になると分かっているところに自分の子供をやる気はない」

「ふうん？　一応親の自覚があるんだ」

「あるさ。たとえ認められなくてもな。それで、あいつに何の用だ？」

「叔父が甥っ子に会いに来るのがおかしいかい？」

「甥なんて思っていない奴が言っても説得力なんてないんだよ」

どうせ暁斗にさらに不信感を植え付けようとでも思っていたのだろう。だが、これ以上あいつをこのくだらない呪いに巻き込むわけにはいかない。

「お前は暁斗もあの子も甥だなんて思っていない。復讐の道具と愛する者の欠片。誰も救われず、幸せにもなれない泥沼の道。お前はそれにあいつらを巻き込むとしてただけだ」

「ずいぶん言いぐさだな。そもその原因を作ったのは誰だか分からないほど馬鹿でもないだろ」

朔夜は口をつぐみ、苦渋の表情を浮かべた。

「ほら、結局お前は何かを言える権利なんてないんだよ。すべてお前が悪いのに、お前は謝罪すらしない。一人でのうのうと幸せを満喫している。だけど、そんなこと赦さない。お前は一生償って生きていくべきなんだ」

要は電源を付けたままのラジオのようにその口を止めなかった。

朔夜はその様子を珈琲をすすりながら何も言わず眺めていた。

まるで子供のようにだと思った。

自分の言いたいことだけを言い、気に入らないことを言われれば頑として受けいれない。

その姿はあまりにも滑稽で、あまりにも惨めなものだった。

そして昔の自分を思い出させた。

一番愚かで、格好の悪かった自分。相手を想いながらも、思い遣ることを考えず、ただ考えも無しに走り続け、転んで止まったときにはすべてを失っていた。

暴走する馬のように自分も他人も傷つけ、結局は欲しかったものも何もかも手に入らなかった。

最後に残ったのは惨めな姿の自分。愚かすぎて、恥ずかしいくらい醜かった自分の心。気付いたときには遅すぎて、伸ばした手はもう何も掴むことはなかった。

今、眼の前にいる彼はかつての自分だ。誰かを想うことを大義名分にし、その誰かを傷つけていることにすら気付かず、すべてを壊していく。

ここで止めなければまた誰かが傷つく。それはきっと、朔夜があの時、ただ一つ見つけたものさえも――。

犠牲があるから救いがあるとか、何かを為すには犠牲が必要だとか、そんな無責任な言葉聞きたくない。たとえどんな幸せがその先に待っていたとしても、払われた犠牲は帰ってこない。痛みを知らない者がわかったかのように言う言葉など、重みもない。犠牲を払うのなら自分だけにすればいい。他者を傷つけてまで為す行為に正義などあるはずがない。

ましてや復讐のために払う犠牲などあっていいはずがない。

勝ち誇ったかのように話し続ける要の話のほとんどが朔夜の耳には届いていなかった。目の前にいるはずの要がかつての自分に見えた。

過去は、終わらさなければならぬ。なかったことにはできなくとも、未来に持って行くには重すぎる。

朔夜は長く閉ざしていたその口を、ようやく開いた。

「言いたいことは、それだけか」

朔夜の一言に要の口が止まった。朔夜はさらに続ける。

「これ以上そちらの話を聞いても無駄なようなのでそこまでにさせてもらう」

要が何かを言おうとしたが、朔夜は言わせる間もなく自分の話を始める。

「俺の話は一つ。お前が復讐をするのは勝手だが、あいつらを巻き

込むのはやめろ」

たった一つの要求。それは要が予想していたものとはまったく違ったものだった。

てつきり落ち込んで何も言えないか、混乱して事情を求めてくるか、はたまた逆ギレしてくるかと思っていた。

しかし朔夜の言葉はそのどれとも違った。

見れば、朔夜はまったく落ち着いていた。先ほどは一瞬顔を歪めたが、それも今では元通りとなっている。

気に入らなかった。その態度が、そのすべてが気に入らなかった。這い蹲って謝ればいい、泣けばいい。自分の息子に憎まれること、そして望まなかったことでも、息子を置き去りにしたこと。すべてに絶望して、自分の罪を悔いたらいい。こいつがもっている幸せをすべてぶちこわしてやる。この十数年の間築いてきたものを、すべて台無しにしてやる。

それだけがこの十数年、そのためにだけに生きてきた。こいつが絶望する顔を見たいがために。あの人へ償わせるために。

なのにこの男はそんなそぶりをまったく見せない。謝罪の念も、絶望の兆しも見せない。そこにあるのは長年憎んできたあの顔。仏頂面で、愛想のカケラもない、あの時と変わらない顔がある。

そして彼は謝るわけでも落ち込むわけでもなく、ただ要求してきた。まるで自分が悪いなど思っていないかのように。

憎かった。赦せなかった。今すぐその顔を思いっきり殴りたい気分になった。

そしてその憎い男はさらに要の気分を害する言葉を続ける。

「お前が過去に囚われ続けることは自由だ。俺は止めはしないさ。だが、そのために他者を巻き込むな。あいつらは関係者ではあるかもしれないが、加害者ではない。そして被害者ですらなかった。過去に関わるか否かはあいつら自身が決めることだ。それを強制して、あいつらの未来さえ巻き込むとする。お前は狂ってるよ」

その言葉が要の精神を揺さぶった。目の前の男に殴りかからなか

った自分の精神を褒めたい。

「狂ってるだど？ お前がよくそんなことを言えるな」
要の表情が歪んだ。

「お前の狂った思考が姉さんや誠司さんを殺したんだ。お前があんな事をしなければ二人は今頃幸せに生きていたはずだったんだ。お前が悪いんだ。狂っていたのはお前だ。お前が二人を、俺たちの幸せを壊したんだ！」

「そうだな、確かにあの二人を殺したのは俺だ」

自分の罪を認めた朔夜を見て、要は自分の勝利を確信した。
間違っているのはあいつだ。俺は正しい。正義の名の下に悪を罰しているんだ。裁かれるはずだったのに裁かれなかった罪人に最高の刑罰を与えているんだ。

そうだ、俺は間違ってなんかいない。

歪んだ笑みが要の顔に表れた。

しかし、朔夜が続けて言った言葉は、そんな要の喜びを打ち消すものだった。

「俺は狂っていた。そう、狂っていたんだ。それは認めよう。だがな、今狂っているのはお前だ、要」

生まれて始めてではないだろうか、彼の名前を呼ぶことは。

朔夜は目の前にいる狂った男の名を呼んだ。

「俺は自分がした過ちを忘れているわけではないし、忘れたことだつてない。償えるものなら償うさ。だが、その償う相手はお前じゃない」

そう、この男が勘違いしているところはそこだ。

殺人事件や人身事故が起きると、被害者側の遺族が加害者に損害賠償を請求する場面をよく見る。泣きながら死んだ家族を返してと訴えている。

しかし、加害者が償うべきなのは被害者の遺族ではない。被害者自身だ。

被害者には何も残らない。命も、未来も、何もかも失っている

がら、得るものは何もない。

大切な人を奪われた遺族は確かに被害者なのかもしれない。だが、被害者自身が救われることはあるのだろうか。どんな大金も、加害者の命も、被害者を蘇らせることはできない。死んでしまったら、もう償うことはできないのだ。

朔夜は最初から一人しか見ていなかった。最初から最後まで。だから償う相手も一人しかいないのだ。遺族に償う気など最初からない。朔夜にとって、加害者を裁ける被害者は、彼女だけなのだ。

要は自分に償うことを要求しているのだ。彼自身も気付いていないのだろう。最愛の姉のためではなく、自分のための復讐なのだということを。

「要、俺はお前に何も償わない」

それだけは過去から未来にかけて何の変わりもなく、そして永遠に変わらぬ事。

最初からあの人は俺を殺せば良かったのに。

第七話 日暮

東城秀一、朔夜の友人。

三十歳、サラリーマン。

十月七日生まれ、A型。

東京在住。一人暮らし。

趣味・映画鑑賞。

座右の銘・『有言実行』

暁斗によくあげたもの・観葉植物

朔夜によくやったもの・説教

朔夜とのつきあい・十五年

朔夜とのつきあい・十五年

朔夜と別れた後、一眠りしてから結局仕事にも手を付ける気にならないまま、東城は友人のことを考えた。

昔から何かに執着するということがなかった友人に出会ったのは中学に入学したとき。その頃はまだ二人の関係はクラスメイトに過ぎず、会話をしたことすらなかった。

そんな二人の関係が親密になったのは三年生の初め頃。桜が緑の葉を付け始めた頃だった。

一度も会話がしたことがなく、にも関わらず三年間同じクラスだったのは偶然でしかない。その存在は知っていた。あちらは知らなかったようだが、東城は朔夜が存在を知っていた。彼は良い意味で

も悪い意味でも目立つのだ。

特に決まった友人もなく、一年の半分ほどしか学校に来なかった。来て誰も話さず本を読んでいるだけ。女子はかっこいい・クールだと言っただけかなりモテていたらしい。しかし一方で関わりにくい雰囲気だとも言われ、敬遠されていた。

東城自身そんな後者の一人で、三年生に上がるまで一言も言葉を交わしたことがなかった。

初めての会話は意外にもあちら側だった。その時の内容を東城は今でも覚えている。

「あんた、映画詳しいんだろ？」

いきなりの言葉に最初は何を言ってるのか、自分に言っているのかすらわからなかった。朝のSHRが終わってすぐ、それぞれが授業の準備を始めていた中、彼は一人で東城に近づき、そんな質問をしてきたのだ。何の前触れもなく、そんなものがないかのように。

「おい、聞いてるのか？」

しばし東城が呆然と朔夜を見上げていれば、不機嫌な態度になった。本当に相手のことなどお構いなしの、ただ我が道を行くという言葉を実行していた。

「ああ、詳しいけど……」

「じゃあこの監督の映画、知ってるか」

そう言っただけ提示されたのは数人の監督の名前が書かれた紙。よく知られているメジャーな名前からコアなファンしか知らないようなマイナーな名前まで。

結局その時は俺からその監督の作品の名前や上映している映画館を聞くだけ聞いて去っていった。その間向こうが俺の名前を呼んだことは一度もなかった。礼すら言わずにあいつは何事もなかったかのように去っていったのだ。

そして俺もその後はしばし呆然とあいつの後姿を見送った。まるで今までの会話が夢であったかのようなだった。それぐらいあいつ

は俺を見ていなかった。ただ本屋で雑誌を調べるような、そんな感覚しかなかったのだろう。だけど、そんなくだらない出会いが俺達の最初の会話だったのだ。

俺達はその頃、自分たちの付き合いがこんなにも長いものになることなど想像もしていなかった。そして、この後に待ち受ける未来さえも――。

神様なんていないのだと、その時初めて気付いた。

お参りなどしたことがなくせに、いざとなると祈るのはカミサマ。慈悲深いのなら、平等なら、きつと助けてくれると心の底では思っていた。都合の良いときだけ祈っていた。形だけの神頼みであっても。

だからあの時知ったのだ。そんな都合の良い存在などいないのだと。いつだって運命は残酷で、現実には冷たかった。

あの時僕達はあまりにも未熟で、愚かだった。それをカミサマは知らしめた。すべてを救ってくれる者などいるはずもない。

あの日の涙を僕は忘れない。

暁斗が家に着いた頃には昼をとくに過ぎていた。朝出てからゆうに五時間以上経っていた。それでも昼食をとる気にはなれず、暁斗はリビングのソファに飛び込んだ。全体重を掛けられたソファは体重分沈んだがそのまま形を留めた。顔に当たる布地は冷たかった。誰も座っていなかったことを表すかのよう。

家には誰もいなかった。彼の父親も。だがその方が良かった。会えばどんな顔をすればいいかわからなくなるからだ。

蒼衣の話は結局何の解決にもならなかった。暁斗の心にさらなる混乱をもたらしたただだった。

母の日記に書かれた恋人、そして父はどこか遠くの国の人間のよ
うにつかめない存在だった。暁斗は父を許せばいいのか、憎めばい
いのか、それすらもわからなくなっていた。

誰に聞けば良い、誰が正しいのか何もわからない。ただわかるの
は長年自分だけが蚊帳の外にいたということだけだ。

母の事も、生き別れの兄弟のことも、そして父のことさえ自分だ
け何も知らされなかったのだ。母親の事を気にしなかったわけでは
なかったが、結局それを知ろうと強く思わなかった。会ったことの
ない母親のことなど他人事のように思えたのだ。それは寂しいと思
わなかったから。現状に満足していたから。それが何かの犠牲の上
に立った幸せなどと考えたことはなかった。

まるで自分の名前のようにうだと思った。

『暁斗』とは暁の星。明けの明星。太陽が昇る頃のわずかな時間
にしか見えない星なのだ。蒼衣の話を聞いた後調べて知った。

星は自分が見える時間の空は見て、見えなくなる時間の空まで
は見えない。きつと見えないのは地球側からだけでなく、星側からで
もそうなのだろう。青空の下に広がる世界を金星は知らない。

自分もきつとそうなのだ。見えないからと言ってそのままにして
いた。それ以上見ようとしなかった。太陽の光に隠された世界の闇
を知らずに生きてきた。

それを知る日が来た。ただそれだけなのだ。それだけのはずなの
に、何も答えが出ない。

そして父に言う言葉も見つからない。

訊きたいことがある。何を？

訊いてどうする？ その後にある変化を受けいれられるのか。
平穏という名のぬるま湯に浸かり続けた身体は外の寒さに耐えら
れない。一度馴れてしまえば後は問題ないのに。

変化が怖い。今ある幸せを失うことが怖い。だから何も言えない。
「俺は、どうすればいいんだ」

一人呟いた言葉は宙に浮いてシャボン玉のように消えた。後には

何も残らない。誰も答えてはくれない。

そういえば、と今頃になって気がつく。父は何処に行ったのだろうか。

ただいないという事実だけ見ていてそれ以上気にはしていなかった。だが既に丸一日近く会っていない。

玄関には靴がなかった。だからいないのだと思った。だが家の中を確かめたわけではない。眼の前のことしか見ないことが自分の欠点だと理解したところだというのに。

どうしようもない自分にため息を吐き、暁斗は起き上がり部屋の中をぐるりと見渡す。

父がいないこと以外はいつもと変わらないはずの部屋。なのに今は実際の気温以上に寒く感じられ、何年も人が住んでいなかったかのようにさえ思えた。たった数時間留守にただけなのに。

誰もいない部屋を見渡すと、テーブルの上にある一枚の紙が眼に入った。帰ったときはそれにすら気付かなかった。

暁斗は何だろうなと思いつながらその紙を手を取った。カサリと音を立てただけで紙は暁斗の手に収まる。最初からそのためにあったかのように。

紙には文字が書かれていた。誰が見てもこれは手紙だ。そしてここにある以上、宛先は暁斗か朔夜しかない。そしてその差出人がここにいない父なら、これは自分宛でしかない。

少し角張った文字は朔夜のものだ。そういえば女子特有の丸っこい文字を嫌っていたなと関係のないことを考えている自分はまだいくらか余裕が残っているのだろう。その余裕は二行足らずの文章によってあつという間に吹き飛ばされてしまったが。

【暁斗へ

俺はしばらく留守にする。いつ帰るかはわからんが心配はするな。何かあった場合は秀に相談しろ。

朔夜】

何だこれ。

それしか出なかった。

弁明も説明もなく、ただ自分勝手な一方通行の言葉だけがそこにあった。

朔夜に会ったらどんな顔をすればいいのかとか、何を言ったらいいのかとかいろいろ考えた。なのに、その本人は何も言わないまま、暁斗に会うことすらなく姿を消した。ただ無責任に、自分勝手に。

「ふざけんなよ、何だよこれ」

この手紙がいつからここにあったかはわからない。ただ本当にちよつと出かけてくるという書き置き以上に意味はないのだろう。父にとって今起こっていることは、息子のことはその程度のものなのか。

ただ怒りが沸いた。混乱にも不安にも怒りが暁斗の胸の内に沸いた。

「ふざけんなよ、こんなんじゃ済ませられると思ってんのかよ！」

ぐしゃりと手の中で紙がつぶされた。

暁斗はズボンのポケットに突っ込んだままだった携帯電話を取り出し短縮から父の番号を呼び出した。そして迷いなく衝動のまま通話ボタンを押した。

呼び出し音が耳の向こうで鳴り響く。しかし止まらない。やがてコール音は機械で作られた女性の声に変わる。留守電センターに繋がると言う案内を暁斗は容赦なく切った。

電話を取れない状況にあるのかもしれない。しかしそうは思わなかった。

再びかけ直してみるがやはり誰も出ない。機械音声の案内が拒絶に聞こえた。

本人が捕まらないのなら相談できる人物は一人しかいなかった。手紙にも書かれた名前。朔夜とは一番長いつきあいであろう、彼を真っ向から叱れる唯一の人物。

電話のアドレスから彼の番号を呼び出し通話ボタンを押す。

コール音は数回鳴った後途切れ、聞き慣れた声が受話器の向こうから暁斗の耳に届いた。

『もしもし、暁斗？ どうしたんだい、珍しいね』

「秀さん、親父が何処にいるか知りませんか」

『朔夜？ 今朝までは一緒だったけど、もう家に帰ってるだろ』

「今家にいないんですよ。しかもしばらく留守にするっていうおかしな置き手紙を残して！」

暁斗の言葉に事態の深刻さを感じた相手は、すぐにそっちに行くと言っただけ言っただけ電話を切った。

暁斗は電話の電源も切らないまま、しばらくその場に立ち尽くしていた。会話の結果から自分が思っていた以上に今の状態が深刻なことを知らされた。おそらく彼は自分以上に現状を理解している。過去も、そして未来も。

これから先何が変わるといえるだろうか。これ以上何も変わって欲しくないと思う一方で、変わり尽くしてくれた方が楽なんじゃないかとも思う。

しかし暁斗の思いなど汲むはずもなく、一度始まった変化は止まらない。

会話を終えた事を表すプープーという機械音だけがいつもと変わらずにいた。

息子からの電話には出なかった朔夜。しかし親友からの電話にはあっさりと出た。

「朔夜、お前今どこにいる」

『東尋坊』

ゴッ

ちなみに今の音は東城がケータイを床に落とした音である。

『冗談だよ』

落としたケータイから朔夜の声が聞こえる。

「笑えない冗談だな」

落としたケータイを拾った東城。幸いケータイに傷は付かなかったようだ。ただし東城の眉間には皺が寄っている。

『そんなに心配しなくても自殺なんて二度と考えないさ。たぶんな』
「そこは絶対と言え」

じゃないと一生不安で仕方がない。

しかし当の本人は？ 気だ。

『先のことなんて保証できるか。電話してきた理由は想像が付くが、予想通りかけてくるのがお前らしい。本当に期待を裏切らない奴だな』

「それは褒めてるのか？」

『一応な』

あまり嬉しくないのは言葉のせいか、言っている人間のせいなのか。

「理由を言う必要がないのなら話が早い。今どこだ。何をすることもりだ」

『場所については行き当たりばったりだな。特に目的地があるわけじゃないし。何をすることも決まってるないな』

「…お前、何がしたいんだ」

『特に何も』

心配しているこっちが脱力しそうな答えだ。

「暁斗が心配してるぞ。話をするんじゃないのか」

『そのつもりだったんだがな。少し考えを変えた。暁斗にはもうしばらく待ってくれるよう伝えといてくれ』

「自分で伝えた方がいいだろ」

『中途半端に会うと良くないこともある。俺も少し時間が欲しい』

「昨日と言っていることが違うぞ。何があった」

『お前は相変わらず察しが良いな。話がしやすい。多少はしよるが、

今朝家に帰ると先生の弟がやってきて、長年の恨み言を言いたい放題。そのまま帰って行った」

それはもう少し緊張感を持って言っても良いのではないだろうか。しかし言っている本人に緊張感は感じられない。

「お前、逆に心配になるぞ」

あの頃の目を離せば死んでしまうのではと思うほど弱った姿は何処に行ったんだ。

『それは多少大人になったということかな。俺もあの男を見て思っただよ。まるで昔の自分のようだなんて』

ただ感情に身を任せ、後先考えもなく行動していた愚直だった自分。今思い出せば恥ずかしいくらいの記憶。

『あれを見てもう少し考えてみたいと思った。昨日ほど投げやりじゃないから安心しろ』「それはお前にとって前向きなことなんだな」

『ああ』

それだけが聞きたかった。

「なら良い。暁斗のことは任せろ」

『すまないな』

「今更だな」

そうだったなと互いが笑い合う。長年支えてきてくれた親友に朔夜は本気で感謝した。

『そう長くはならないと思う。自分の中で整理が付けたいだけなんだ』

「わかってるよ。後のことは心配しなくていい」

『それと暁斗のことだが、もし本人が気にしているのなら話してくれてもいい』

「自分で話さなくていいのか？」

『言い訳にしか聞こえなさそうだしな。本人から聞くよりも第三者から聞いた方が説得力がある。あったことだけ言ってくれたらいい。俺も後で話がしやすい』

「わかった。暁斗が訊いてきたらこちらから話しておこう」

『ああ、それと秀』

「何だ？」

『ありがとな』

電話はそれきりだった。親友の珍しく素直な感謝に以前なら不安を覚えただろう。しかし今はそう思わない。あいつは必ず帰ってくる。その時前へ進むか、ここで道が終わってしまうかはわからない。だが、戻ることは決してない。そう信じたから。

第八話 曙

暁斗の元に東城が来たのは電話をして二十分ほどした頃だった。会つてすぐ、彼は暁斗に朔夜との電話の内容を伝えた。

暁斗は当然納得できなかった。

「何でそれで済ませちゃったんですか。今やるべきことは他にあるでしょ！」

しかしそれも東城の前では子供の癪癢にしかない。

「あいつなりの考えがあつてのことだ。君は僕と一緒にあいつが帰ってくるのを待つんだ」

「納得できません」

「できなくていい。君には聞く権利も責める権利もある。しかしまだ子供だ。冷静になりきれしていない」

「子供だからって、そんなことで他人事にしないでくださいよ！俺は当事者なんですよ。なのに何で何も知らされないんだよ！何で何も教えてくれないんだよ！」

二人は今暁斗の家のリビングにいた。椅子に座る暇もなく始まった会話は、座る機会を失わせたまま続いていた。

ただひたすら怒鳴り続ける暁斗を前に、東城は聞こえないよう小さくため息を吐いた。

「今だから言うけど、朔夜は君に迷惑をかけないために今まで黙っていた。知ったところで良いことなんてないだろうしね。今回のことはイレギュラーだった」

「なければずっと黙ってたってことですか」

「君が自力で辿り着かなければそうなっていたかもね。ただもう一つ言えることは今まで言わなかったのは君がまだ子供だからだ。子

供だつて無力じゃないと言うのは本当に自分の力をわかっていない人間の台詞だよ。君たち子供は君たち自身が思っている以上に無力なんだ」

「そんなの」

「そんなの大人の傲慢だつて言いたいかい？ それはまだ君が大人になつてないから言えることだ。君も大人になればわかる。ただ、子供の無力さや愚かさが一生涯の罪になることもある。世の中子供だからって許される問題ばかりじゃない。その愚直が罪となることもあるんだ」

暁斗は初めて眼の前のこの人が自分とは違う世界の人間なのだと感じた。

身近にいたから気付かなかった。この人も父も、自分とは違う『大人』なのだ。大人と子供では住む世界が違う。その思考も、道徳も、何もかもが違う。この人達は今の自分達の何倍も先を進んでいる人たちだ。

だからといって、それで納得できる問題ではない。どうあつても子供から見れば大人の傲慢ほど許し難いものはない。自分だつて一人の人間なのに、それを認めてもらえない。子供だからって大人にすべて劣っているとは思わない。子供にだつてできることはある。無力だなんて言わさない。

「やつぱりそれは大人の傲慢ですよ。大人だからって万能とは限らないでしょ。子供だからって無力とは限らないはずだ。俺達だつてできることはあるんです」

「やつて、それでどうするんだい？」

東城の口調がいつの間にか厳しいものとなっていた。その視線も、暁斗が今まで見たことがない真剣なものだ。

「確かに君たちはやろうと思えばある程度のことはできるだろう。だけどその後どうするんだい？ それでもし何か起こったら、君はその責任を取れるのか？」

「取れますよ」

「それは親と一緒に謝罪すること？ それとも親に弁償してもらうことか？」

東城の言葉はすべての子供を断罪するかのように響く。

「結局君たち子供は親の庇護下にある存在でしかない。自分で自分を養うこともできない。子供の自由なんて親の庇護下にしかないんだよ。その庇護を受けられずに自由を得られない子供だっている。結局君たちの言い分は恵まれた人間の無知でしかないんだよ」

自分の世界を作っていていける子供などフィクションの中にしか存在しない。どんなに勇敢な少年も、彼らが起こす奇跡の物語も、最後には『この物語はフィクションであり、実在の人物・事象とは何も関係がありません』との注意書きで夢を否定されてしまう。

どんなに窓を開けて毎夜待っても、ピーターパンはやってこない。世界を救う勇者も、戦うべき悪者も存在しない。すべて夢の世界の住人。

大人には夢がないと言うのは、彼らがかつて持った夢を否定されてきたからだろう。だから世間の冷たさも、人間一人の無力さも知っている。何も知らずに夢を語ることは誰にだってできる。しかし叶えることは難しい。

結局子供は親の翼の中でぬくぬくと育つしかない。そこを勝手に飛び出てこんな筈がないと文句を言うのは子供である証拠だ。

暁斗の両目に涙があふれてきた。泣くつもりなどなかったのに、あまりにも冷たい言葉に身体が先に泣いてしまった。東城もそれを見て言い過ぎたことを認めた。

「すまなかった。言い過ぎた。何も君たち子供が悪いわけじゃないのに。ただ知っておいてほしかった。僕たち大人は君たちが思っている以上に子供のことを想っているんだということ。そして夢だけではやっていけない世界があるんだということ」

ただ知って欲しかっただけなんだ。いつか飛び立つ世界の冷たさと厳しさを。その時になって傷ついてほしくないから。

子供だって人を救える。だけどそれよりも簡単に罪を犯せる。無

知と無計画、愚直がたやすく罪を生んでしまうのだ。

それを僕はあの時知った。

涙をこぼすまいと袖で荒く涙をぬぐう暁斗に、幼い頃の親友の姿を見た。彼は泣きもしなかったけど。泣くことすら許されなかったけど。

「……十五の時だ」

それはあまりにも静かに始められた。暁斗は始め東城が何を言うとしていたのかがわからなかった。

「朔夜は十五の時に罪を犯した。そしてその始まりは十四の時。ちょうど今の君と同じ歳の時だ」

それはまるで懺悔するかのよう。罪人はここにいないのに、なぜか彼が懺悔しようとしているように見えた。

「教えてあげよう、君が知りたがっていることを」

あれだけ責めるように言った彼が、あっけなくその話を始める。まるで最初から決まっていたかのように。

長い話になると言って、東城はソファに座り、暁斗もその向かいに座らせた。喫煙者ならここで煙草を一服するかもしれないが、残念ながら東城は煙草を吸わない。代わりに彼は一回深呼吸をした。

眼の前のテーブルの上にはグシャグシャにつぶされた朔夜の置き手紙が。飲み物でも用意するべきだったかもしれないが、二人ともその考えには行き着かなかった。

そして懺悔の物語が始まる。物語という名の過去が語られる。

「常磐夕夏さんは朔夜の家教師だった人だ」

海が見える展望公園。朔夜の姿はそこにあった。一人で考え事をするとき、海を見るのは決して悪くない選択だと思ったからだ。夕方になれば海に沈む夕日が見られるらしい。その為その瞬間をカメラに納めるべくやってくるカメラマンも少なくないらしい。

しかし今いるのはせいぜい旅行中に立ち寄った家族やカップルぐらいのものだ。

朔夜はぼんやりと柵にもたれながらも、時折後ろを走り去る子供やベンチに座るカップルの姿に視線を向けた。

一般的な家族や恋人にあこがれを感じたことがないと言えば嘘になる。両親と旅行をしたことなど一度もない。共働きでそれなりに忙しい人たちだったのだから仕方がない。いつの間にか自分自身、そういうものだとあきらめがついていた。

しかしいつか自分に恋人ができて、家庭を持つて、あのように楽しく日常を過ごす日がいつか来るのではないかと子供の時には思っていた。現状を諦めた分、未来への期待があつた。子供じみた夢だと今なら笑える。それが永遠に來ないことを知らなかったあの頃だからこそ、夢が持てた。

立ち続けるのも疲れ、朔夜は背後にあつたベンチに腰を下ろす。新しくしたばかりなのかもしれないそのベンチはそれほど汚れていなかった。

ぼんやりと海を眺めながら、ここで煙草が吸えたら格好がつくのにと思い笑った。あいにく肺を冒す煙を吸う趣味はない。ただ今は手が暇だ。本を読めば良いかもしれないが、それでは考え事などできない。結局ぼんやりとしているしかないのだ。

なるほど、煙草はこういう時には役に立つのかもしれない。それでも吸ってみたいとは思わないのだが。

珈琲でも買ってこれば良かったかなと思つたが、今更買いに行く気にもなれない。いくら考えても最終的な答えは変わらないのだ。

考え事と言っても、実際は気持ちの整理だ。押し入れの奥に仕舞いっぱなしだった荷物を引きずり出すように。一度引っ張り出すと余計なものまでどんどんあふれてしまうのだが、それもまとめて整理しようと思う。

さて、どこから始めようか。まずは始まりを見つけなければならぬ。

物書きの性なのか、記憶が形式ぶった文章になっていく。いつそのこと文章にしまえば整理が楽なのかもしれない。しかしこんなつまらない物語、本にはできないな。誰も買いはしないだろう。

まあ、まずは始めよう。最初の文章はどう打とうか。回りくどい方法も悪くはないが、今は率直に書くのが適切だろう。

常磐夕夏は――。

平凡だった。少なくともその容姿や学力に於いては。

常磐夕夏という人は学力や容姿で言えばそれほど目立つものではなかった。平凡かそれより少し上。しかし彼女の父は一企業の社長で、それも日本でも名の知れた会社だった。だから彼女の環境がとても裕福で、住んでいる家も豪邸であつたことは何も驚きはしない。いわゆるゆ社長令嬢だった。

そんな彼女が家庭教師のバイトをしていたのかは理解しづらい。社会勉強だと言っていた気がする。最初は金持ちの道楽にしか聞かえなかった。その経歴を聞いただけであまり印象を持たなかった。だから彼女に魅力を感じることもなどないと思っていた。初めて彼女に会い、その姿を見たときまでは。

既に立派な不登校児となっていた俺の成績はひたすら底辺を走っていた。当然と言えば当然だ。勉学に励んだことなど一度もないのだから。

親が無関心なことを良いことに俺は好き勝手やった。と言っても犯罪行為や不良の真似事をしたわけではない。ただ学校をサボり、近所の図書館やゲームセンター、映画館に行っていたくらいだ。それ以外は家で本を読んだりパソコンをいじって時間をつぶした。補導員に見つかからないよう、彼らが来る時間を把握した。店員はわざ

わざと通報してまで客をつぶしたくはないので黙っていてくれた。

何がしたかったわけでもない。強いて言うならしたいことがなかったのだ。補導員を避けたのは面倒ごとを回避するためであって、それで学校や親に知られても問題はなかった。親は困るかもしれないが、それを申し訳ないと感じることはなかった。

この世に生まれた以上、自分は自由に生きる権利がある。親であろうと束縛する権利はない。まるで自分一人で生きていけるかのような子供っぽい勘違いをしていた。自分が親に庇護されなきゃ生きていけない子供だということさえ自覚していなかった。

まあ、この年頃ならそう思う子供も多かっただろう。大人と子供の中間。中途半端に社会に出て社会なんてこんなものなのかと軽視していた。

だから親がいなくても自分一人ぐらいどうにかなると、すべての責任を取れるのだと思ってしまうたのだ。

それを後悔するのは、恥じるのは大人の第一歩。自分が子供であったことを自覚することが子供を卒業する始まり。

まだ子供の殻すら破っていない、大人に近づいているのは身体だけ。そんな青臭く、愚直だった十四の年。生まれて初めて家庭教師がつけられた。

正直な所、両親がそんなことをするなど思っただけ。子供など養えばそれで良いと思っただけ。いや、そう思っただけ。

この時の両親が何を考えて俺に家庭教師をつけたのかは未だにわかっていない。あの親にも親らしい感情があったのか、それとも世間体のためなのか。それを考察するほど俺は両親を理解していない。互いが無関心だったのか、それともそれは俺の一方的なものだったのか、何もかもがわからずじまいだ。自分も親になれば何かわかるかもしれないと思っただけ、結局わかっていない。

同じ親という立場でも、その思考や教育は人それぞれなのだろう。ただ、親も一人の人間なのだと。そして親

になってもなかなか人というものは変わらないのだと。その根っこは変わらないのだ。親になってそれを改めて理解した。

自分が良い親になれたとは思わない。しかし親になったからわかること、成長することもあるのだと初めて知った。その意味ではあの人達にも信念や愛情があったのかもしれない。ただそれを俺が感じ取れなかっただけで。

話を戻そう。理由はともかく、ある日両親が俺に家庭教師をつけた。俺はもちろん断った。しかしそれは既に決定事項で、俺に選択権はなかった。

そのことに憤りを感じていなかったと言えば嘘になる。しかしそれ以上に驚きがあった。親から学業について何かを言われたことがなかった。家族らしい会話など久しかった。そんな彼らから息子の学業を心配する態度が見られたのだから。

最終的に親の意向を受け入れたのは俺だった。珍しい親らしい行動に親孝行してみる気になった。どうせ中学を卒業するまでの短い時間だと思って、新たな暇つぶしにしてみるのもいいかと思ったのだ。

俺自身、勉強が嫌いであつたわけではない。たぶん普通に勉強すればそれなりの成績も取れることも自覚していた。ただ強制的な学生生活や、偉そうな教師が気に入らなかっただけだ。クラスメイトと何を話せば良いのかもわからない。愛想を振りまくことが嫌いだつた。自由にならない環境が嫌いだった。それを強制する大人が嫌いだった。

大人なんて皆同じだと思っていた。傲慢で、子供を見下す。カワイイ、愛してるなんて言ってる腹の中では、その優越感に浸っている。そんな生き物なのだと。

しかしそんなことを思っている自分自身が彼らを見下しているのだと気付いていなかった。いや、気付きながらもそれに気付ける自分の方が優れているのだと感じていた。

夢を語ることなど子供の仕事だと見下していた。子供の人生を決

めつける大人を批判した。そして自分は優れた大人だと優越に浸っていた。

今考えれば恥ずかしい青春の汚点でしかない。しかしその頃の自分は大まじめだった。本気でそう思っていて、それが正しいのだと信じていた。

親にある程度付き合うのも子供の義務かと思って付き合ってみた。それが自分のそれまでを完全に塗り替えるとは知らずに――。

第八話　曙（後書き）

子供なりの理論と大人なりの理論。どっちが正しい正しくないとは言いません。しかし大人にはそれに至った経緯があるのです。大人に反抗したがるのはまだ子供の証拠かもしれません。どうすれば大人になるか。それは我慢強く、寛容になることが一つの道なのだと私は思います。反抗する前に大人のことも考え、大人も子供のことを考えてみてはどうでしょうか。

第九話 真昼

常磐夕夏は会ってそれほど経たない内に、俺の顔を殴った。

叩いたのではない。殴ったのだ。もちろんグーで。会って一時間も経っていない子供を、思い切り殴ったのだ。

「常磐夕夏です。よろしく」

確か数十分前にはそう笑顔で言っていた彼女が眉間に皺を寄せ、

「甘ったれるなーーーーー!」

そう言っただけ俺の顔を思いっきり殴ったのだ。若者風で言えば（怒）が付くだろう。

確か最初は簡単な自己紹介をしていたはずだ。しかしいつの間にか大人や子供の価値観云々の話になっていき、俺の中の価値観が彼女に暴露されたのだ。

俺の子供じみた価値観が彼女の導火線に火を付けたようだ。残念ながらその導火線がラブソングにあるようなときめきの導火線ではないのは確かだ。

某アニメの主人公みたいに親父にもぶたれたことがないのには言い返さなかったが、無関心の両親が我が子を説教するはずもなくやはり殴られたこともなかった。

そんな俺を初めて殴ったのが血の繋がりもない、初対面の女なのだからその時の俺のショックは大きかった。女にはわからないかもしれないが、男が女に殴られるのは結構ショックな出来事なのだ。しかも恋沙汰で叩かれたのならともかく、グーで殴られるとは後にも先にもあれ一度きりだろう。というか何度もあって欲しくないのだが。

殴られたときはショックのあまり何も言い返せなかった。痛いと

感じる前に驚きが勝ってしまつて、しばらく呆然としていた。あそこまで説教されることも初めての体験だったのだ。

俺を殴った彼女は床に座り込んだ、というか椅子から転げ落ちた俺の前で仁王立ちし、説教を始めた。

「あんた一体何様のつもり？ あんたみたいな子供が一人で生きていけるほど社会は甘くないのよ。大人が偉そうだつて？ あんたの方がよっぽど他人を見下してるじゃない。他人を見下す人間ができた大人だと思つてんの？ そういう人間をダメ人間って言ふのよ！」

俺が止める間もなく説教を始めてしまったので、俺はそのまま呆然と彼女を見上げるしかなかった。

「子供だからなめるとか、そんなセリフが通用するのはごく一部の人のだけよ。あんたにみたいなガキが世の中渡つていけるわけじゃない。勝手に大人だから子供だからって決めつけてるのは誰でもないあんたじゃない。それで自分だけは特別だと思いたがるの？ それが子供だつて証拠じゃない。大人だつてそれなりの苦労があつて大人になつてんの。あんたが思つてるほど世界は簡単じゃないの。ちよつと自分の周囲を見ただけで全部理解したつもりになつてる。そういうのを井の中の蛙って言ふのよ」

その頃には俺の中の彼女の見解がはつきりと変わつていた。最初の平凡だという印象は跡形もなく消し飛んでいた。それまで見たことがない人種の間人だった。

まあその時はまだ恋心などなかった。もしかしたら自覚がないだけで、既にその兆候はあつたのかもしれないが、とにかくその時は彼女を見返してやりたい。本当の立派な大人になつてやると、闘争心がふくらんでいた。

それが始まり。

朔夜が思考を一度中断したのは、一人の子供が視界に入ったからだ。

まだ小学生だろう。野球帽を被った男の子は懸命に缶ジュースの蓋を開けようとしている。不器用なのか指が滑ってなかなか開けることができないようだ。

周囲を見たが、親らしい人間が彼の元にやって来る様子はなかった。少し離れた木陰でお喋りをする数人の女性がいるから、おそらくあの中の誰かだろう。

おおかた子供にジュースを買いに行かせ、自分自身は他の奥様とお喋りを楽しんでいるのだろう。そんな親が子供の苦勞に気付くはずもない。子供も親に助けを求めようとしない。意固地になってしまっているのだろう。ムキになって缶をガリガリと引っ掻いている。さすがにそれをずっと目の前でやられたのでは放っておけない。

朔夜はやれやれと立ち上がり、子供の方へ歩いていった。

子供は朔夜が目の前に来るまで気付かなかった。朔夜は何も言わずに子供の手からジュースを取り上げた。子供は驚き、盗られたのだと思い文句を言おうとしたが、その前に缶の蓋に指を掛けた。

子供があんなに苦勞していた蓋はわずかな抵抗だけ示してあつてなく陥落した。

「ほら」

朔夜は蓋の開いた缶ジュースを子供に返す。子供は手の中にある缶と朔夜を交互に見比べ、しばし考えた後、

「ありがとう、おじさん！」

そう礼を言って走り去っていった。

礼を言われるのは良いことだが、おじさん呼ばわりされるのは少しショックだった。これでも二十代にしか見られたことがなかったのに。

そこで朔夜は笑ってしまう。いつの間にか自分はそんなことを考えるほど年をとっていたのだ。いつの間にかあの人の年すらも通り越して。

子供には開けられない缶の蓋。大人の自分には開けられた。いつから大人になっていなのかはわからない。成人すれば？ 社会に出れば？ それは大人と呼べるのだろうか。

朔夜はあれほどこだわった大人のラインすら考える暇がないほど、これまでの時間を過ごしてきた。暁斗が生まれてからすべてが早くなった気がする。子供が成長するのはあつという間だと聞いたことがあるが、なるほどその通りかもしれない。

子供にとっては長い時間が大人にとっては短い時間に感じられる。ついこの間まで抱き上げられるほど小さかった赤ん坊が、いつの間にか背を追い抜かしている。そんな話だって少くない。まあ暁斗はあまり身長が高い方ではないし、逆に自分は背が高い方なので追いつかされることはないのかもしれないが。

もう昼飯時はとうに過ぎている。腹も減っていた。ついだと思いい、近くの茶店へ向かった。軽食ぐらいあるだろう。

それが終わったらまた思考を巡らせてみよう。その前に移動しても良い。適当にバイクで走り回り、適当に宿を探そう。何だか日本横断までしてしまいそうな勢いだ。

まあそれも悪くない。覚えていたら暁斗たちに土産を買ってこよう。特に秀は内心怒っているだろうから機嫌をとった方が良い。

とにかく、今は腹を満たそう。

そうして朔夜は茶店の扉を開く。カランコロンと来客を伝える鈴が鳴った。

昼飯のタイミングを逃したのは暁斗たちも同じだった。

キリの良いところで話を中断し、遅い昼食をとる。食事を作る暇もなかったので出前を取った。

食事中、二人はまったく会話をしなかった。暁斗は何を言ったら

良いのかわからなかったし、東城は話題がなかった。

出前としては定番のラーメンを二人で黙々と食べる。ズルズルと麺をすする音が無駄に大きく聞こえた。

重たい空気のまま、食事を終えようとしていた時、東城はふと思いついた。

「そつえば、朔夜の最初の頃の食事はラーメンか焼き飯だったな」突然何を言い出したのかと暁斗は視線をラーメンから東城に向ける。東城は何かを思い出し、ふと笑った。

「朔夜は高校に入るまで家事をしたことが一切なくてね、両親も家事はほとんどせずにハウスキーパーを雇ってたから、あいつ自身も母親の味というものを知らなくてね」

一日のほとんどを外食か出前、コンビニ弁当で済ませていた。たまにハウスキーパーが食事を作ってくれたらしいが、昔から手料理というものに縁がなかったという。そして自分で作ろうと考えないところが朔夜らしかった。

「高校時代、遠方の親戚に預けられたことがあってね、そこで初めて手料理を知ったそうさ。そこで料理を習ってこればいいのに、結局家事の一つも覚えずに帰ってきてね。君と暮らすようになってからは赤ん坊どころか自分の世話すらまともにできなかった」

赤ん坊を育てるなんて高校生には難しかった。だがそれ以前に家事ができなかった。

さすがに毎日コンビニや出前ではやっていけないかったのだろう。というより他人が作ったものを受け付けなくなっていた。少しでも自分で手を付けたものしか食べられなくなっていた。

「あばらが見えるほど食事をしなかった時期もあったんだからそれよりはマシだったが、元々自分を大切にしない奴だったからな。赤ん坊の世話は結構がんばったがその分自分をないがしろにしまつてな。インスタントのラーメンや適当に具を放り込んだ焼き飯ばっか食べてた」

初めて聞く父の無能ぶりに暁斗は驚きを隠せなかった。彼が物心

ついた頃には家事を一人でやっていたし、暁斗の作る料理は文句も言わずに食べていた。だから父にそんな時期があったことに驚いた。東城も暁斗が驚くのは予想内だったのだろう。暁斗の様子を見てクスリと笑った。

「あいつがそんなに有能だと思ってたのかい？ 間違いだよ。あいつにだってできないことはたくさんある。今も昔もね」

なんせ一番ダメだった時期を見ているのだ。親友のダメっぷりをすべて話していたら日が暮れてしまう。

「あんまりにも家事ができないから僕が毎日世話をしに行かなきゃならなかった。子育てをしつつ、家事を教え込んで、僕の両親は男でも家事ができた方がいいって考えの人たちだったから、それなりにできたしね。それでも大変だったよ。何で親のあいつより僕の方が疲れるんだか。当時の編集者に子守押しつけたりして胃潰瘍にしたこともあったな」

「あ、それ知ってます」

朔夜は小説家としての人気はそれなりに高いのだが、出版社からすれば理解しにくい人間だった。それが彼の書く小説にも現れているのだが、読者からすればフィクションの登場人物は少々常識外れの方が面白いようだ。実際にいればやりにくだけの人物なのだが。

おかげで彼の担当をやりたがる編集者は皆無だという。ここ数年は金森編集者が担当しており、彼女以外では無理だろうとさえ言われていた。

「さつさと家を出て今の仕事を始めて、あの頃が一番慌ただしかったな」

大変だったとは言わなかった。それ以上に大変だった時期があったから。本当に大変な時というのは、氷の上に立つような危なげで冷え切った空気なのだ。それに比べたらあのどたばた騒ぎはそれまでの冷え切った空気を暖めてくれるのにちょうど良かったのかもしれない。

二度とはやりたくないが。

「それでも、あの時はあれが最善の選択だったのかもしれない。少なくとも僕はあいつがしたことすべてを罪だと言う気はない」

ああ、話はまだ終わってなかったのだ。そう、今に繋がる物語はすべて同じ場所を原点としている。

「暁斗」

東城は優しくその笑みを向ける。

「ありがとう」

「へ？」

何に感謝しているのかが暁斗にはわからなかった。自分は何も感謝されるようなことはしていないのに。

「子供はね、大人にとってそこにいるだけでうれしいんだ。特に親にとってそれは生き甲斐だったり宝だったり」

すべての子供がそうとは言えない。世の中には不幸な子供だってたくさんいる。だけど。

「さっき子供だって簡単に罪を犯せると言ったね。だけどね、本来子供はそこにいるだけで人を幸せにすることができるんだ」

「俺、何もしませんよ」

「うん、でもそれでいいんだ。ただ生まれてきてくれた、それだけでいいんだ」

すべての終わりを迎えたかのような彼を救ったのは自分でも彼女でもない。この子なのだ。

「君が生まれてきてくれた。それだけで僕達は救われた。だからありがとう」

生まれてきてくれてありがとう。

真っ正面からそう言われて暁斗は照れくさかった。何と答えたら良いのかすらわからなかった。ただ自分は自分で思っていた以上に愛されていたのではないか。

ふと以前父とした会話を思い出した。

『親になりたくて親になったわけじゃない人間もいるんだ』

「親父は、俺が生まれて良かったと思ってるの？」

蒼衣の話を聞いてから感じていたそれを、暁斗は口にした。それは父自身に聞くべきなのかもしれない。しかしそれを直接訪ねる勇氣はなかった。

もし否定されたら、自分はどうなってしまうのだろう。

暁斗の心情をある程度理解しているのか、東城の口調はまるで諭すかのようだった。

「良かったよ」

それは紛れもない真実。

「君が生まれてきてくれたから今のあいつがいるんだ。君がいなければ屍のように生きるしかなかった」

「でも、俺も常盤も、生まれる予定じゃなかったんでしょ？」

母の日記帳に書かれていた真実。愛し合った二人の間に生まれた子供ではない。

「……何か知っているのかい？」

東城も暁斗がまったくの無知でないことに気付いた。

「今朝、常盤が……俺の兄弟だって奴が来て、母さんの日記に書かれていたことを教えてくれたんだ」

実はあの日記には途中までしか詳しく書いていなかった。途中で日付が飛び、その後は一言二言、義理のように書かれていただけだったという。

日記を書く暇も気力もなかったということなのか、それとも形に残しておきなくなかったのか、それはわからなかったが。

ただ朔夜との間に二人の子供が生まれたこと。そして朔夜を愛していなかったことだけが書かれていた。

『これは私があなたに残す唯一のもの。あなたが育てて。あなたにあげられるのはこれだけ』

日記の最後に書かれた、朔夜に向けて書いたと思われる文章。

『私はあなたを愛せない。だから、さよなら』

それは永遠の別れとなった。母はその後すぐに死んだのだ。彼女は自殺したのだ。

愛し合った二人の子ではない。なら父にとって、母にとって、自分たちという存在は何だったのだろうか。彼女は自分たちを残すことで何がしたかったのだろうか。

「俺は……俺たちは母さんが愛してもいない男との間に生まれた。そして親父もそれを知らなかった。なら俺たちは何の為に生まれたの？」

何を望まれて生まれてきたのだろうか。そして、それは父にとってどんな意味を与えたのだろうか。

望んでもいない子供を抱いたとき、彼は何を思ったのか。愛情か、それとも迷惑だと思ったのか。

俺は、親父に愛されていたのか？

「愛してるよ」

まるで暁斗の心の内を呼んだかのように、東城は言い切った。

「朔夜は君を愛しているよ。そしてもう一人の子がいると知っていたのなら、その子も愛していた」

「そんなのわからない」

「わかるよ。あいつを見れば」

他人にも自分にも無関心だったあいつが、あの人以外に眼を向けた。それ自体がその証拠だ。

「あいつは君の作った料理を食べる。一緒に暮らしている。話をしている。それだけで十分なんだ」

昔から愛情を伝えるのが下手くそだった。いや、はっきりと伝えることを恐れてしまったのかもしれない。それでも、

「あいつは他人を信用しない。信じられない。だから他人と一緒に暮らしたり手料理を食べたりするなんてあり得ない。話をしても必要以上には話さない。そんなあいつが君と一緒にいる。それだけでわかるんだ」

あの一件以来、他人を遠ざけるようになった。自分も他人も信じられなくて、他人が入ってくることを極端に嫌うようになった。食べ物すら受け付けなくなった。

彼が一番ひどい状態だったとき、闇に沈みかけていた時、彼を救ったのは誰でもない、一人の子供だった。

「生まれた時に求められていなくても、生まれてきたから愛せるものだってあるんだ」

暁斗は今まで感じていなかった父の愛情を改めて実感した。そういうものだと理解していたつもりで、本当は何もわかっていなかったのかもしれない。

今自分は愛されている。それだけで十分だ。

もう一度考え直してみたい。これから話の続きを聞いて、そして父を改めて理解したい。

父をもう一度信じてみよう。母でも叔父でもない、自分のたった一人の家族を。

第九話 真昼（後書き）

子は親を選べない、親は子を選べない。だからお互いを支え合っていけばいい。

私が読んだ小説の一文です。子を形成するのは環境と本人が生まれ持った性質だと私は思っています。朔夜は暁斗と会うことで再び光を取り戻しました。暁斗は朔夜に新たな始まりを与える星だったのです。

第十話 夜半

意外にも先生は俺の家庭教師を辞めなかった。それはもちろん俺の方も同様で、むしろそれまで打ち込んだことのなかった勉強に励んだ。

しかしそれ以上に彼女との時間は価値あるものだったように思える。

俺はほとんど行っていなかった学校にも登校し、中学に入ってから一度も受けなかった試験も休むことなく受けた。

最初はあると呼びわけていた彼女を先生と呼ぶようになっていた。それだけでも俺の中の先生の印象が変わったことを表していただろう。

両親や担任もまともになった俺の学校生活を喜んだ。少しではあるがクラスメイトとたわいもない話をするようにもなった。彼女の存在が俺の生活を変えていった。それまでつまらなく、ただ生きているだけの白黒の世界が、色を付け鮮やかになっていった。

少し見方を変えるだけでこんなにも世界は違って見えるのかと、今までもつたいたないことをしていたのかもしれないと、初めて生きることに喜びを覚えた。

だから、俺が先生に恋心を抱いたのは別に不思議なことではなかったのかもしれない。

次第に俺は先生の表情を、動きを、眼に焼き付けるようにしていった。先生を好きになった理由なんていちいち挙げられない。人が人を好きになるのに理由など要らない。理由など後付で構わない。問題はその結果。その人を愛したという事実だけなのだ。

先生は俺より五歳年上の大学生だった。父親は会社社長の上流家

庭。中流家庭のうちとはまったく違う。

まず、そんな問題よりも俺の想いは一方的なものでしかなかったということ。そして彼女には既に恋人がいたこと。その方が問題だった。

先生と会って半年ほど経った頃、試験の結果が良かったご褒美として食事に連れて行ってもらった。

その頃にはとくに自分の想いを自覚しており、彼女に振り向いてもらいたいという思っていた。もちろん、彼女の恋人の存在は知っていた。しかし会ったこともない男に負ける気はしなかった。

だからその日、先生の彼氏を紹介してとせがんだのは確認したかったからだ。相手がどんな人物なのか。先生に本当に見合うほどの人間なのか。

今思えばこれが間違いの始まりだった気がする。会わなければあれほどの嫉妬心に駆られることはなかっただろう。自分との差、どんなに努力しても報われないことを。

知らなければ夢のままでいられたのだ。たとえ告白して玉砕しても、一時の傷でいられたのだ。

だから、これが最初の誤り。

「朔夜、この人が田上誠司さん。私の彼氏」

そう言って紹介された時、既に罅が入っていたのかもしれない。

あの時俺はどんな顔をしていたのだろう。

「初めまして、田上誠司です。よろしくね朔夜君」

人柄の良さそうな雰囲気男性が俺に手を差し出した。何の悪意も傲慢もない、ただ礼儀正しく、それは年下に対しても。初めて会った子供の俺すら対等に扱ってくれたのだ。

しかし既に俺にはその行為一つ一つが良い方にとれなかった。いや、とりたくなかった。こんな完璧な人間が傍にいてるのは、俺の入り込む余地なんてない。

俺のどす黒い悪意を隠しきれていたかはわからない。もしかしたら最初からすべてお見通しだったのかもしれない。

それでも彼の態度は変わらなかった。どこまでも『良い人』だったのだ。

三人でファミレスに入り、会話をしながら食事を摂った。先生は育ちの割には庶民的で、こういった場面で贅沢をすることはなかった。親の金に頼る気はないのだという。不思議にも最初は金持ちの道楽としか見ていなかったのに、この頃には言葉のまま、むしろ良い意味でとっていた。その人に抱く感情が違っただけで、こんなにも見解が違っただけだ。

何を話したか細かいところまでは覚えていない。しかしその三時間ほどの邂逅だけですべてがわかった。

田上誠司という人の完璧さ。話せば話すほどその人柄の良さ、善意が感じられた。何の汚点もない、誰が見ても完璧だと認められる人物だということを。

運動こそ苦手としていたが、それすらチャームポイントに見えるだろう。それよりも目立つのはあふれ出る善意。まるですべての人に平等に接するかのような態度。悪い所など挙げられない。そんなことをしているこっちがよほど悪者に見える。

そんな人だった。先生のふさわしいとかそんな次元の問題じゃない。どうやっても届かない、どこまでも完璧な人間。こんな人間が世の中にいたのかと、本気で驚いたものだ。

それが先生の恋人でなければこんなにもコンプレックスを感じることはなかっただろう。しかし残念ながら彼は先生の恋人で、そしてもう一つわかったのは先生がどこまでも彼を愛していることだった。

その言動を、表情を見れば一目瞭然だった。普段から先生の一つ一つを見ている俺だからこそそれははつきりとわかった。悲しいほどに。

彼女が自分の彼氏をさん付けで呼ぶのは大学の先輩だという経緯がそのまま残っているかららしい。変ではないかと思ったが、それが彼女らしいのだと、好きに呼んで良いのだと、優しく言う誠司さ

んに、先生は頬を赤く染めた。

声の温度が、笑い方が、赤く染まる頬が、何もかも俺と話するときとは違う。俺の前では年上の女性という印象が消えていない彼女が、まるで一人の恋する乙女に見えたのだ。いや、その通りだった。彼女は彼に恋をしているのだから。

その場は針のむしろだった。二人の声さえ耳障りだった。その場を離れたくて仕方がなかった。

もしかしたら先生は俺の気持ちに気付いていてわざと諦めさせるために紹介したのかもしれない。今ならそう思える。

俺の気持ちにまったく気付いていなかったとは思いにくい。何せあんなにも熱心だったから。彼女が彼の前で態度を変えるのと同様に、俺も彼女の前では他の人とは違ったのかもしれない。

彼女がそれを煩わしいと思ったのか、それともあくまで穏便に事を済ませようとしたのかはわからない。

ただ、わかるのは彼女が俺の気持ちに答える気がないという、ただそれだけだった。

愛をください。パンも水も要らない。ただ私は愛に飢えているのです。

愛をくれないのなら私を殺してください。愛なき世界では私は生きられないのです。

あなたが愛してくれないのなら私は死んでしまいます。それぐらいならあなたの手で殺してください。

あなたの中途半端な優しさが私を傷つける。じわりじわりと私の爪をはがしていく。

私を愛してください。それができないのなら殺してください。それもできないのなら、あなたを殺させてください。

あなたの髪の毛一本さえ私は愛します。たとえあなたが私を愛さ

なくても、私はあなたを愛しています。

その心をくれないのなら、身体だけでもください。その骸を抱いて私は眠る。あなたの心臓にキスをして、その血をすべて飲み干し、あなたと一つになろう。

愛をください。でなければ殺してください。でなければ私のために死んで。

（『愛なき世界より愛を込めて』三つ

星出版 皆月朔夜）

父の小説が頭によぎった。

珍しく父が書いた恋愛をテーマにした小説。それだけの理由で珍しく活字を読もうと思ったのだ。

小説の評価は賛否両論だった。こんなもの恋愛ではないと言う人もいた。なにせ嫉妬に駆られた主人公が愛する恋人の周囲の人間を殺していくという話なのだから。

ありもしない浮気相手に嫉妬し、恋人と親しくするすべてに嫉妬した。

最後には恋人を殺し自分自身も死んでしまう。救いも何もないアンハッピーエンドだ。

なぜ父がこんな小説を書いたのかわからなかった。愛故に狂った男の話なんて、父には縁のない話だと思っていたからだ。

でも今ならわかる。父はこの主人公に自分を投影したのだ。かつての自分の罪を忘れまいとするかのように。

「あの小説を書いたのはあの一件からちょうど十年経った頃だ」

東城の中にもあの小説が思い浮かんだのだろう。

「あれはあいつなりのけじめだったのかもしれない。そのままとは言わないが、主人公の心情は自分自身がかつて抱いたものなのだろう」

自分の過去は小説にならないと言っていた。あまりにもドラマ性がないから。

他人の不幸は蜜の味と言うが、確かに見ている分ではおもしろいのかもしれない。ドラマの世界など他人の世界だ。当事者がどんなに悲しみに呉れようが、視聴者は同情して泣くだけだ。

他人事だから笑える、泣ける。同情とはそういうものだ。

「物書きを職業に選んだのは第三者の目から見てみたいからだと言っていた」

東城は言う。

「第三者はドラマをどう見ているのか。自分自身が物語を書くことで自分の過去を冷静に見られる気がするんだそうだ」

物語を描くことはある意味神に等しい。登場人物達からすれば、著者は神と言えるだろう。しかし、著者は自分の考えもしないことを書けない。万能ではない。神にはなれない。むしろ著者になることは自分の中身を多くの読者にさらすことだ。

美しい部分も、醜い部分も、それを作っているのは著者自身。物語を自分の中で完結させるか、周囲に伝え同時に自分をさらすか、プロと趣味の違いはここにあると朔夜は思っている。

「僕はあいつのしたことすべてが罪だとは思わない。あつてもそれは朔夜一人の罪じゃない。だけど、あいつやあの男はそう思っていないようだ」

あの男とは、父を人殺しと呼んだあの男のことだろう。暁斗にとつては叔父である人物。

「あの男は夕夏さんの弟だよ。最後に会ったときは高校生だったか。僕は会話もしたことがないが」

あの男は朔夜しか見ていなかった。憎悪に染まった瞳で、彼を睨んでいた。

「……朔夜が夕夏さんを愛したことが悪かったんじゃない。田上さんに嫉妬したことが悪かったのでもない。ただ、間違えた」
「何を？」

「さじ加減。自分の想いを優先するあまり、相手のことを思いやらなかった。さじ加減を間違え、あふれた想いが相手を傷つけた」

溶けきれない砂糖が水の底に溜まる。いずれは器からこぼれるほど溜まる。

「途中で間違っていることに気付けば良かったんだ。だけど朔夜は気付かなかった。気付かないまま水に砂糖を注ぎ続けた」

そして僕はまだそれに気付くほど朔夜を知っていなかった。

「気付いた時には遅かった。すべてが遅すぎた」

若さ故の過ち。その言葉だけで済ませられる問題ではなかった。

「朔夜が夕夏さんと会って一年ほど経った頃、あの日に起こった」

あの日は雨が降っていた。

第十話 夜半（後書き）

人を愛することはすばらしい。しかし相手のことを思いやらねばそれもただの暴力となる。

好きな人の一番になりたい。たったそれだけで、しかしとても難しい願い。愛情はその使い道を間違えることで人を傷つける凶器にもなります。

第十一話 逢魔時

あの日は雨だった。だから血は洗い流される。だが傷は癒えない。なぜこの人が俺の前にいるのか。なぜ階段の下で倒れているのか。なぜ動かないのか。

あの時は何も考えつかなかった。

『死』が眼の前にあつた。

誠司さんとはあの後何度も会った。授業の日だけでなくプライベ―トでも先生と会うようになっていた。先生の弟にも会ったことがある。ほとんど顔を覚えていなかったが。

しかし先生はあくまで俺のことを生徒か弟のようなものとしか見ていなかったのだろう。

それで満足していれば良かったのだ。そばにいらればいいのだと、それだけで満足していれば。

しかし俺の心は満足しなかった。誠司さんに会ってさらに想いが募った。あの笑顔を自分だけに向けて欲しいと思った。

その意味では先生のあつたのかわからない目論見は失敗したと言える。

俺の嫉妬心は収まるところを知らなかった。本当に先生を愛しているのか、それすらわからなくなるほどに。

そんな俺に誠司さんはあくまで親切な態度を崩さなかった。もし先生の恋人でなければ親しくもなれただろう。尊敬できたかもしれない。

しかし恋敵ではどんなに良い一面も悪い方向にしか見えない。彼のことを知るたびに、コンプレックスが育っていった。子供の自分とは違う、大人で、優しく、親切で、何もかもが俺の上だった。いや、比べることさえできない。それくらい彼はできた人だった。何か欠点でもあれば良かったのに、あってもそれは彼の評価を下げることはないものだった。それに対し俺は誇れるものが何もなかった。ただ、彼女への愛情は負けないつもりだった。

それは自分の内のことだけだと思っていた。それが他人を傷つけることなど思っていなかった。いや、傷つけても彼女を手に入れたいとさえ思っていた。それが彼女自身を傷つけていることに気付かずにはいた。

一方的な愛は時に相手を傷つける。

彼は優しくすぎた。ただ自分と彼女のことだけを考える人間だった。あのようなことは起こらなかっただろう。いや、そんな彼だったから俺はあんなにも嫉妬したのだろう。

善意は黒く澱んだ嫉妬に飲み込まれた。

一ヶ月ほど前から先生の様子がおかしいことに気付いていた。プライベートの誘いもなく、俺からの誘いも断っていた。この頃には俺も先生へのアプローチを続けていた。先生が好きだという映画を調べて誘ったりもした。秀と知り合ったのはその頃だ。

あいつも俺が誰かが好きでそのために話題を集めていることには気付いていただろう。だからその手の話題も多かった。

最初に話しかけたのは彼が映画に詳しいという話を耳にしたからだ。先生は映画が好きで、よく映画に誘われた。だが俺は映画を見はしても監督などのこだわりはなく、ほとんど時間つぶしに行っていただけなので、彼女が好きな監督の作品すらわからなかった。

話題を作るために彼女の好きな映画を調べた。中にはコアな作品もあったので、そこは秀に教えてもらった。あいつもかなりの映画好きで、訪ねた次の日には解答を用意してくれた。パンフレットやポスターを見せてもらって、その監督の作風や映画の構成などを教わった。

今は映画を自主的に見ることなどないが、たまにあいつの映画鑑賞に付き合ったりする。それが決して嫌いではなかった。あいつも俺がそれなりに楽しめる映画を選んでいるのだろう。今も昔も、本来なら俺はあいつに頭が上がらないはずだ。もっとも下げたことがないのだが。

好きな人がいることは伝えた。彼女が年上なことも。しかし恋人がいることだけは伝えていなかった。言えば反対されると思ったからだ。

「僕もあいつの思い人に恋人が好きな人がいるんじゃないかと疑ってたよ」

東城は言う。

「いつも誰かと競うような感じがした。もしかしたらあいつの好きな人には他に恋人がいるのか、それとも同じように彼女のことが好きな人がいるのかもしれない。そう思っていた。それはほとんど確信に近かった」

だが東城は会ったこともないその誰かよりは目の前の友人を応援したかった。

「直接会ったことがないから夕夏さんと田上さんがどれほど愛し合っていたかを知ることができなかった。ただ朔夜が嫉妬に駆られていることはわかっていた」

それでも止めなかった。いつか諦めるか、それとも入る余地があ

るのかもしれないと思ったからだ。

「だけど朔夜が入る余地などまったくなかった。僕は田上さんに会ったことはないから彼がどんな人だったかは人を通してしか聞いていない。だけど朔夜があそこまで嫉妬したのだから、きつといい人だったんだろうね」

「母さんには会ったことがあるんですか？」

暁斗の問いに東城は首を縦に振ることで答えた。

「僕と朔夜が少なくとも友人と呼べるぐらいになった頃かな。二、三度会ったよ。最初は偶然朔夜と出かけているところに居合わせた」その時の朔夜はまずいものでも見られたような嫌そうな顔だった。そんなに会わせたくなかったのかと憤慨しかけたが。

常盤夕夏という人は外見こそ目立つものではなかったが、その明るさや人柄は確かに魅力的だった。はつきりした性格で年上であることを驕らない。

「朔夜が夢中になるのもわからなかった。それくらい魅力的な女性だった。強い人だった。きっと多少のことではへこたれないほどに。自分で道を切り開いていけるほどに」

だから思いもしなかったのだろう。彼女があそこまで墮ちることに。

「強い女性だと思っていた。だけど彼女は僕達が思っているほど強くはなかった」

人を恨まずに済ませるほど、出来た人ではなかった。

「夕夏さんが日記に何を書いたかは知らない。だけど、彼女が朔夜への恨みをそこに書いていたとしても、僕は驚かない」

「親父がそれほどの罪を犯したから？」

「違う。彼女は強くなかったから。僕達が思っている以上に女で、そして人並みに弱かったから」

彼女が強ければあのような事態には陥らなかったのかもしれない。少なくとも朔夜が罪悪感に溺れることはなかったはずだ。

もちろん彼女を責めることはできない。しかし、

「僕は夕夏さんが好きじゃない。いや、正直に言えば嫌いだ」

傷付けるだけ傷付けて自分は逃げた。自分にとつての優先順位は朔夜の方が上だ。だからそう言えるのかもしれない。

「夕夏さんは憎しみを断ち切れなかった。彼女のことを好きな人たちは皆、朔夜を責めた。朔夜の味方は僕ぐらいだった。誰も知らなかったんだ。被害者が加害者になることを。復讐や報復という名の凶器を持っていたことを」

朔夜自身すらそうであつた。報復される義務があるのだと考えていた。

「君たちを産んだ夕夏さんが何を考えていたかは未だにわかっていない。彼女は何も残さなかった。だから推測は真実に繋がらなかった」

自分勝手な推測が飛び交つた。その一つ一つが朔夜を傷付けた。そして朔夜自身、自分を傷付けた。

「被害者だからといって誰かを傷付ける資格はない。僕はそう思つてゐる」

弱いことが罪なのではない。本当の罪はそれを認めないこと。

「朔夜は自分の過ちと弱さを認めた。だけど夕夏さんやあの男は認めなかった。だから僕は彼らが嫌いだ」

過ちがさらなる罪を生んだ。その発端が朔夜であつても、すべて彼の性だとは思わない。

「罪を認めた。だから朔夜は前に進めた。大人になるということは子供時代の自分の非を認めることだ」

弱い自分を認める。逃げるわけでも捨てるわけでもなく、受け入れる。

「いつも正しい真実があるとは限らない。真実は見るものによつて形を変える。一つだけじゃない」

朔夜が悪いのだというのも真実。夕夏が悪いのだというのも真実。「真実は一つとは限らない。だからそれを押しつけてはならない。

一つの真実に固執してはならない」

そうわかっていても、合理的に考えられないのが人の性。
自分自身も、そして朔夜も。

先生の様子がおかしい理由がわかったのはそれから一ヶ月後。あの日だ。

先生はおかしいというよりは落ち込んでいて、俺とも眼を合わさなかった。俺はただでさえ行き場のない嫉妬心が溢れていて、それが態度や行動に出ていた。

彼氏との約束がある日に無理に引き止めたり、大学の帰りに待ち伏せたり、今思えばストーカーギリギリの行為だったろう。しかし当時の俺はそれを悪いことなどとは思っていなかった。

愛しているのなら、何をしても構わないとさえ思っていた。それがどれだけ彼女を困らせていたか、傷付けていたかも知らずに。

その日は朝から曇り空で、いつ雨が降ってもおかしくない天気だった。なのに鞆に入れておいた折りたたみ傘は壊れており、俺は学校帰り雨の中走らなくてはならなかった。

彼は俺を待っていたのだろう。雨の中、傘を差して俺の家の近くで待っていた。

その日は珍しく母親が昼間から帰っていたので家に招きはしなかった。彼を前にして冷静でいられる自信がなかった。

結局来た道を少し戻り、近所の公園に向かった。公園のベンチの上には屋根が設けられている。俺たちはそこに座り話を始めた。

最初は彼が来た理由がわからなかった。先生と三人以上で会うことはあっても、彼と二人きりになったことなどなかった。せいぜい先生が何かの用事で離れる数分の間ぐらいだろう。その時でさえ何も話せずだまり通していたというのに、今ここで何を話せばいいのかわかるはずがない。

できれば一緒にいたくないとさえ思っていた。この人がいると自分の悪い所が浮き彫りになっていくような気がしたから。

「そんなに緊張しなくても良いよ」

俺の心境がわかつているのか、それとも彼の純粋な優しさがそうさせているのか、彼はいつだって俺に笑顔を向けていた。俺が彼にどんな表情を見せているのかはわからないが、きっと醜かったに違いない。押さえることのできない嫉妬心があふれ出ていただろう。

だから俺の嫉妬に気付いていたはずだ。

だけど彼はそれを不快に感じなかった。いや、感じていたのかもしれないがそれを表に出すことはなかった。だけど今なら本当に彼は不快に感じていなかったのではないかと思う。どんな人間も許してしまえる、そんな人だったから。

善人過ぎた。だから人の悪意すら許してしまった。

彼に非はない。だけど、彼がもつと嫌な人間だったら、もつと身勝手な人間だったら、俺はあんなにも罪悪感を感じることはなかっただろう。

彼が良い人だと知っていたから、彼が何も悪くないとわかっていたから、罪は大きかった。酌量の余地もあったかもしれない。

でも、悪いのは俺一人だった。一人の悪人が一人の善人を殺した。ただそれだけなのに、それがどんな罪よりも重かった。

「君は、夕夏のことが好きなんだろ？」

改めて確認されると恥ずかしいのと同時に、彼に言われて不愉快な気持ちでもあった。誰でもない、彼だから嫌だったのだ。

勝者と敗者の差を見せつけられているようで。

「夕夏は君のこと嫌いじゃないしむしろ好きだと思う。でもそれは恋じゃない」

なぜ自分はこの人とこんなことを話しているのだろう。どうしてこんな話をしなくちゃならないんだろう。

「君の想いは美しくもあるけど醜くもある。重すぎるんだ。だから相手を傷付けてしまう」

「…俺が、先生を傷付けていると？」

「はつきり言えばそうなるね。というより困らせているが正解か」
誠司さんはどこまでも善人だった。俺を信じていた。本当は良い子なのだと。話せばわかってくれるのだと。

誠司さん。もしできるのなら、愛が人を傷付けることがあると言ったあなたに言いたい。あなたの優しさが俺を傷付けていたのだと。あなたの光は俺にはまぶしすぎたのだと。

「人を愛することはすばらしいことだ。だけどいきすぎた愛は時に人を傷付ける。それを相手が受け入れられないのなら、それは暴力でしかない」

「言ってる意味がわかりません」

「……君の愛情は夕夏には受け入れられない」

はつきりと断言された。心の底ではその可能性を感じていた。いや、確信していた。だけどそれを認めてしまえば本当にそうになってしまう気がして、絶対に認めまいとしていた。

自分でも認めたくないその事実を他人に、それもあなたに言われたあの時の俺の気持ちをあなたは完全に理解することは出来なかったでしょう。

善人のあなたには悪人の気持ちなど理解できるはずがない。

「君がどんなに彼女を愛しても、彼女はそれを決して受け入れはしない。むしろこのままでは君のことを嫌うようになってしまいうだろう」

「そんなのまだわからない。決まってるじゃない」

「いや、わかるよ。彼女は今君とどう向き合えば良いかわからなくなっている。これ以上押し込めば君を憎むことになるだろう」

「何で自分を愛する人を憎むんですか」

「愛はいつだって報われるとは限らない。どんな感情にだって負の面がある。いつか夕夏は君の想いを煩わしく思い、嫌悪する日がやってくる。その前に終わらせなければならぬ」

「何ですかそれ。もっととはつきりと言ったらいい、諦めろって。こ

れ以上嫌われる前に消えろって。そうすればあんた達は幸せになれるんだろ？」

「そついう話じゃない。相手の幸せを願うことも愛なんだ。君は自分勝手な思いに振り回されている。彼女のことを思っていない」

「思ってるよ！ 誰よりも、あんたよりも！」

敬語なんて忘れた。冷静なんて忘れた。ただ内にある嫉妬や怒り、憎しみをぶちまけた。

「何であんたみたいな人間がいるんだよ。あんたじゃなければ俺だつてもつと素直に諦めることができたんだ。あんたが完璧すぎるから俺は無駄に競おうとしてしまう。あんたがもつと嫌な奴だったらぶちのめされて立ち上がる気にもならなかった。なのにあんたは善人過ぎて、完璧すぎて、中途半端に俺に期待させてしまう。何で俺じゃなかったんだ。何であんたが先に生まれて、先に先生と会ってたんだよ！」

わかつてる。たとえ立場が逆であっても、先生は俺に振り向かない。先生は絶対に彼を選ぶ。最初から俺は選択肢にすら含まれていなかったのだ。

先生を想ってるのに、愛しているのに、嫉妬が強すぎて、憎しみが広がりすぎて、仕舞いには先生すら憎んでしまいそう。それを必死に押さえてきたのに。

「なあ、愛して貰えない気持ちがあんたにわかるか？ 敗者を慰めて楽しいか？ 愛して欲しいだけなんて願い、あんたは持ったこともないんだ。何もわかってなくせに偉そうに言うな！」

叫びが雨の音すらかき消す。通りすがりの人間に聞かれているのではないかと、そんなことすら考える暇もなかった。自分と彼しかこの場にはいない気さえしていた。

荒い呼吸がうるさい。雨の音がうるさい。世界中のすべてがうるさい。みんな俺を笑っている気がして。

誠司さんは俺の訴えを最後まで聞いた。いつの間にか立ち上がり、彼の前に仁王立ちしている俺をじっと見上げていた。

そして言った。

「……僕には君をどうこうする権利はない。だから僕達の方で動くしかないと思った。今日はそのことを話そうと思って来たんだ」

先程までの俺とは真逆で、誠司さんは静かだった。

「ここ一ヶ月、僕と夕夏は会っていない」

「へ？」

聞き間違いだろうか。以前なら二日と空けずに会っていたはずの二人が、一ヶ月も会っていない？

「君の気持ちが夕夏を困らせているとわかったとき、同時に君自身も傷ついているとわかった。だから君が考えを落ち着かせるまでの時間が必要だと思った」

それが一ヶ月？ いや、今日この話をしたということはまだこの先もということだ。

「互いばかり見て周囲の人の気持ちを考えてなかったのかもしれない。今回はそういう意味でも会わない方が良く僕は結論した」

「…それ、先生は了承したんですか？」

彼は首を縦に振ることで答えた。

「最初は反対したけど。でも離れていたからといって愛情が薄まるとは思わない。愛とは本人たちの間だけで完結できる問題でもない。実際にはそう簡単なことではないんだ。この社会で愛を成立させるには周囲の理解も必要なんだ」

社長令嬢という立場の彼女の交際を周囲が認めていたかはわからない。しかしこの二人がいつか結婚という祝福を受けられるのは思っていた以上に難しいことなのかもしれない。

「だからこのことは君だけの性ではない。あくまできっかけしかない。君が彼女のことを愛し続けるのは自由だ。だけど、それは誰にも祝福されないことをわかって欲しい」

今日はそれだけ言いたかった。そう言って彼は立ち上がった。

「君の中でも整理をつけた方が良く。それが君のためにもなる」

そして彼は傘を差し、雨の中へと戻っていった。

そこまでは覚えている。

「十数段の階段から落ち、田上さんは死んだ」

東城はあくまで事実だけを述べた。

「何が原因だっけ。確か頭蓋骨がどうこうしたとか、そんな理由だったと思う。まあそれは重要じゃない。問題は彼が死んで、朔夜がその場にいた。それだけだ」

死体と一緒にいれば、階段の上には自分しかいなくて被害者が下にいれば、誰が見ても想像はするだろう。

「……親父が殺したんですか？」

訊くのが怖かった。答えを聞いてしまえばすべてが終わってしまう気がした。それでも、訊かずにはいられなかった。

東城もそれはわかってるのだろう。重々しく首を横に振った。それは否定の意味ではなかったが。

「わからない、というのが現実だ。現場にいた朔夜自信も事態を把握していなかった。というよりショックのあまり記憶が一部飛んだ。そして目撃者は誰もいなかった。だから真実は闇の中。その一件は事故として片付けられた」

朔夜には動機もあるが、殺した証拠はない。しかし殺していない証拠もなかった。ただ彼の死だけが事実として残った。

「当時朔夜が殺したという疑惑が多かった。無理もない。朔夜はそこであったことを誰にも言わなかったんだから。僕だってそれを教えられたのは一年以上経ってからだ」

話を聞きつけ朔夜の元へ向かった。だが朔夜は自室に閉じこもり、誰にも会おうとはしなかった。

「両親でさえあいつを信じていなかった。信じるほどの信頼もなかったんだろっ」

世間体を気にし、訴える遺族への対応に追われた。だから朔夜の周りには誰もいなかった。

「何度も会いに行っただけど一度も顔を見せてはくれなかった。結局その後すぐ騒ぎが落ち着くまで田舎の親戚の家に預けられることになった」

朔夜は反対も何もしなかったという。ただ一人、暗い部屋でじっとしていたのだと。

「家を出る前日、夕夏さんが朔夜の元を訪ねてきた」

あの日から止まない雨だった。まるで彼の罪を許さないと訴えるかのように。

あの日、先生が俺の元にやって来た。

いつかは来ると思っていた。俺を罰するのは誰でもない、彼女だと確信していたから。

先生は俺の部屋に入ると床に座り、しばらく黙り込んでいた。

その表情は俺が見たことのないものだった。いつも明るく、笑顔を向けてくれていた先生の表情は暗く、地に沈み込みそうなほど重かった。

俺は最初から言い訳も何もするつもりはなかった。言い訳が見つからないのだから。

あの雨の中、どうして誠司さんが階段から落ちたのかは覚えていない。なぜ俺は階段の前にいたのかも。

誠司さんの後を追うように雨の中に飛び出した気がする。それすらもはつきりとはしないが。そこで彼に何を言った？ いや、何をした？

もしかしたら本当に俺が突き落としたのか？ 彼に対し殺意がなかったと言えるのか？ 消えて欲しいと思ったことがなかったのか？

あの姿は俺の望み通りだったのではないのか？

俺はあの人を殺したんじゃないのか？

善人を殺すことで俺は本当の悪人となってしまったのではないだろうか。いや、最初から俺はあの人を殺すつもりでついていったのではないのか？

何も、誰も答えを出してはくれない。ただあるのは各々が持つ真実だけ。

殺したかもわからない。だけどその原因はきっと俺にある。それが俺の持つ真実だった。

先生が持つ真実はどんなものなのだろう。この人は何をしに来たのだろう。

どれぐらい時間が経ったかはわからない。数分しか経ってなかったのかもしれない。だけど、時計を見ることさえしなかった。ただ互いを見ていた。

先生が口を開いたとき、俺は終わりを感じた。すべての終わりを。

「…最後に会ったの、一ヶ月くらい前なの」

「うん」

誰に、とは訊かない。訊かずともわかるから。

知ってるよ。彼から聞いたのだから。

「しばらく距離を置いた方が良いつて。周囲の人のことも考えた方が良いつて言われて、私も最後には了承した」

「うん」

知ってるよ。それも彼から聞いたのだから。

「私はそんなもの必要ないと思つてた。二人が想い合っていればそれで良いんだと思つてた」

宇宙を構成する最低人数を知っているだろうか。答えは二人。二人いればそのには世界が生まれる。

「だけど、誠司さんはそれじゃあダメなんだつて言つた。これからの幸せのためにも、周りのことも考えなければならないつて」

自分たちの幸せのために他人を不幸にしてはならない。

なんて素敵な理想論。なんて愚かな夢。すべての人が幸せになる方法などあるはずもないのに。他人の幸せを考える前に自分の幸せを優先しなければ踏みつぶされてしまう。いつだって幸せは他人を踏み台にして手に入れるものなのだ。それが大きければ大きいほど。ただどあの人は本気で信じていたのだろう。自分も他人もみんな幸せになれる方法が存在すると。まるで夢みたいな未来を、思い浮かべていたのだろう。

しかし現実には残酷だった。今、彼の幸せは踏みつぶされ、一つの柱を失った世界は崩れていこうとしている。

俺はそれを止めることも、直すこともできなかった。

その柱を壊したのは俺なのだから。

「ねえ、私誰を憎めばいいの？」

彼女は言う。

「誰を憎めば救われるの？」

そんなこと、俺が知るはずもない。

だって、救われる方法なんてもう有りはしないのだから。

「先生がしたいのなら俺を殺してもいいよ」

俺は逃げも隠れもしない。

「でも、俺を殺して先生が救われるかは保証できない。でも先生には俺を罰する権利がある」

誰でもない、あなただけが俺を罰することができる。

だが、先生はそうしなかった。

「嫌だよ、私人殺しにはなりたくないもの」

「俺のことが憎いのに？」

「そうだよ。きっと私は君が嫌い。真実なんて関係ない。ただ私たちが不幸にした君が嫌い」

彼女から呪詛のように言葉が紡がれる。

俺は数日前までこんな状況考えもしなかった。彼女から人を呪う言葉が出るなんて、想像もできなかった。

きつと彼女を変えてしまったのは俺。いや、それまで見えなかつ

た彼女の弱さを引きずり出してしまったのかもしれない。

あの明るく魅力的だった人は、もうどこにもいない。

「先生、俺は何をすればいいですか？」

何をすれば償いになりますか？

彼女は生氣のない眼で俺を見つめていた。

「…抱いて」

「へ？」

意外な解答だった。

「私を抱いて。あの人がしたみたいに」

「…それでいいんですか？」

「うん、それでいいの」

そう言われてしまつては俺が逆らうことができなかった。元々彼女のために何でもしようと思つて決意していたのだ。

それが少し予想を外れただけで。

両親は留守で、家の中には俺たち二人しかいなかった。

いつも寝ているベッドが棺桶のように思えた。まるで死体とセックスをするかのような気分だった。体温があるのに心の温かさは何も感じられなかった。

俺はかつてこれを望んだのではなかったのか。彼女を抱きたいと思つたのではないのか？

そうかもしれない。だけど、これは俺が望んでいた形ではない。これは呪いだと言った。

「忘れないように刻んであげる。あなたに呪いをかけてあげる」

電気もついていない、暗闇の中、時折光る雷だけが光源だった。

「私を忘れないで。罪を忘れないで。忘れたら許さない」

雨の音がうるさかった。彼女の言葉を遮るように降り続ける雨が

煩わしかった。

「私はあなたを絶対に愛さない」
それだけが真実。

そうやって、俺の恋愛は終わりを告げた。そしてこの日が俺と先生の永遠の別れとなった

第十一話 逢魔時（後書き）

誰が悪いとか悪くないとか、そんなものは本当はないのかもしれない。しかし憎まなければ自分を保てないこともある。

本当の善人はその優しさが時に人を惨めな気持ちにさせていることに気がきません。だから自分に刃を向けられてもその理由がわからないのです。

第十二話 暁

次の日、俺は逃げるようにして町を離れた。遠い田舎で長い時間を過ごした。

もちろん学校に戻るわけもなく、卒業式にも出ないまま卒業した。田舎の高校に入学したが何をするわけでもなく、ただ無駄に日々を過ごしていた。

その間秀から電話や手紙が何度も来た。ただ一人俺を心配してくれた。それが不思議にもありがたかった。先生以外で初めて善意を受けいれた。

もしかしたら人の愛情に飢えていたのかもしれない。真実はどうであれ、自分を信じてくれる人間が一人でもいることに救われた。そして時間は俺の心のある程度まで癒してくれた。

最初はろくに食事も出来なかった。しかし死ぬ気にもなれなかった。先生との約束を果たせなくなるからだ。俺は生きて罪を背負い続けなければならない。

先生があの後どうしたのかは何もわからなかった。秀が調べようとしてくれたが、彼女の家の人間に門前払いを喰らったようだ。どうやら彼女は大学を辞め、家に閉じこもり続けているらしい。

俺が与えた傷の深さを改めて実感した。無責任にも俺の傷は癒え、彼女の傷は癒えることを知らない。時間は彼女を救わなかった。

それをはっきりと知ったのはそれから一年ほど経った頃。俺は冬休み、生まれ育った町に帰ってきた。忘れないために、そして彼女がどうなったか気になって。

帰還を伝えたのは両親と秀。そして先生だった。

手紙が彼女の手に届いたか、彼女がそれ呼んだかはわからない。

しかし彼女に何も隠したくはなかった。自分が彼女の手の内にあることを示したかった。

その冬初めての雪が降った日、俺は帰ってきた。駅には連絡を受けていた秀が迎えに来てくれた。秀は純粹に俺の帰還を喜んでくれた。

「少し痩せたか？　ちゃんと食べてるのか？」

「食べてるよ。これでも一時期よりはマシなんだ」

たわいもない話が楽しかった。それを感じられるほどに俺は回復し、それが少し後ろめたかった。

「家に戻るのか？」

「いや、その前に先生の所に行ってみる」

おそらく会うことはできないだろう。しかしその意志だけでも示しておきたかった。会って何を話せばいいのかはわからない。会っても何もできないだろう。だが、会っておきたかった。理由はわからないが。

「……僕も一緒に行こうか？」

「いや、一人で行くよ。行かなきゃならないんだ」

そう言えば優しい友人は引いてくれる。その優しさに甘えていた。俺は一人で先生の家に向かった。先生の家に行ったのは一度だけだ。先生の家はまさしく豪邸で、初めて見たときは驚いたものだ。確かその時に先生の弟を紹介された。名前さえ覚えていないが、あまり良い印象ではなかったと思う。俺に負けず無愛想で、表情を一度も変えなかった。

まだ雪の積もっていない道を歩く。吐く息は白い。そして雪も白かった。

なのに、黒が見えた。黒い服の人々。その姿は悲しんでいるようだ。

そしてなぜか彼らは先生の家に向かっていった。何があつたのだろう。嫌な予感が頭をよぎった。かつて見た死が再びささやいた。

あの服は何だ。喪服しかないだろう。残忍な死神が頭の中で答えた。

誰が死んだんだ。決まっているだろう。死神が笑っている。

俺はその声を降りきり、家の正面に立つ。そしてそこに立てかけられた看板を見た。

『常盤夕夏 葬儀』

他にも色々細かく書いてあった気がする。だがもう何も見えなかった。絶望がすべてを塗りつぶした。

俺は喪服の集団が行き交うその場でただ一人、佇んでいた。

「僕がそのことを知って朔夜の元を訪れたのは次の日だ」

東城の頭の中にあの時の光景が蘇る。

「本当にひどい状況だった」

実家の自室に再び籠もった朔夜はまるで屍のようだった。

その眼に焦点は合わず、壁に寄りかかったまま呆然と座り込んでいた。

その手足に力はこもっていない。

「食事摂らず、風呂にも入らず、ただ思い出したように時々水を飲んだ。時折自傷行為を行い、放っておくと手や腕が血まみれになっていた」

壊れた。そう表現するのが一番だろう。

そんな息子に近寄りたくないのか、朔夜の両親は息子の世話を東城に任せた。

「泊まり込みで世話をした。話しかけてもまったく反応せず、生きるための最低限のことしかしなかった」

今も忘れられない。あの時の朔夜を。泣くこともせず、抜け殻の

ように、静かに朽ちていく。心が死んでしまったかのようにだった。しかし決して死のうとはしなかった。自傷行為はあくまで死をもたらしようなものではなかった。おそらく彼は死すら許されていなかったのだろう。夕夏に約束させられたから。

暁斗には信じられなかった。父にそんな時期があったことを。

彼の知る父は物事の多くに無関心で、とにかく我が道を行く人だ。自由気ままに生きる。その言葉を体現していた。

そんな父が一人の人間の死により朽ち果てる。そんな状況想像もできなかった。

「信じられないかもしれないけど本当のことだ。少なくともその状態が一ヶ月近く続いた」

外がクリスマスや正月の活気で賑わっている中、朔夜の部屋だけ切り離されたかのように静かだった。

さすがに栄養失調になりかけ、医者を呼んで点滴を打ってもらった。だが病院には入れなくなかった。

入院してしまえば、もう二度と出てこない気がしたからだ。

「夕夏さんの死については後で調べてわかった。手首を切って自殺したということが」

遺書はなかったという。そして彼女が死んだのは朔夜からの手紙が届いた日だった。

「朔夜の手紙が何らかのきっかけだったのかもしれない。朔夜の帰還が彼女を追い詰めたとは思わない。だけど何かの理由にはなかったんだろう」

最後まで朔夜にその存在を刻みつけていった。彼女は何がしたかったのだ。

「夕夏さんの葬儀から一ヶ月ほど経った頃、彼女の弟が訪ねてきた。暁斗は蒼衣と一緒にいた男を思い出す。朔夜を人殺しと呼んだ男。蒼衣に父への憎しみを植え付けようとした男。

「そいつは一人の赤ん坊を抱きかかえていた」

あまりにも違和感のある光景だった。

部屋には男が三人。そして赤ん坊が一人。なぜ赤ん坊を連れてきたのか最初はまったくわからなかった。

男は常盤要といった。常盤夕夏の弟。その態度からも彼が姉を愛していたことは明白だった。

「無様だな」

要は朔夜を見て開口一番にそう言った。

「人二人死なせといて、勝手に落ち込んでこの様か。何被害者面してるんだ」

お前は加害者だろ、人殺し。

ただ決めつけていた。すべて朔夜が悪いのだと。朔夜が二人を殺したのだと。そしてその死にショックを受けている朔夜に追い打ちをかけようとしていた。

「お前が誠司さんが死んだ。お前の性で姉さんは死んだ。全部お前が悪いんだろ」

東城はそれは違うと言いつ返したが、そんな言葉聞いていなかった。ただ自分の中の憎しみに溺れ、罰する側である優越に浸っていた。そんなことのために来たのか。そう思ったが、どうやらそれはついでのようなのだ。

「お前にこれを渡しに来た」

これと言って差し出したのは、その場に合わない赤ん坊だった。

赤ん坊は眠っていたが、寝心地が悪いのか不機嫌そうだった。

「姉さんの遺言。死ぬ直前にこの赤ん坊をお前に渡せと言ったんだ」
その時はなぜと思ったが、彼女は既に死ぬことを決めていたのだろ。

「こいつはお前の子だとさ」

朔夜の眼に光が戻った。驚きのあまり。驚いたのは東城も同様で、要の腕の中の赤ん坊を凝視した。

「妊娠が発覚したとき、みんなはすぐに墮ろすことを提案した。だけれど姉さんはそうしなかった」

最初からそのつもりだったかのように。

「出産日から逆算しても誠司さんの子供ではありえないんだと。そして姉さん自身がお前の子だと言った」

なぜ彼女は愛してもいない男の子供を産んだのか。誰にも理解できなかった。

「姉さんが決めた。だからお前に渡す。それだけだ」

その後のことまでは知らない。そう言っただけで要は赤ん坊を朔夜の前に置き、去っていった。

残された赤ん坊は固い床に降ろされぐずり始めた。

東城は突然のことに混乱を隠せず、また赤ん坊をどう扱ったら良いのかわからず慌てた。

しかし一方の朔夜は何も言わずに赤ん坊を抱き上げた。

その抱き方が始めてで下手くそなものだったが、動きはしっかりしたものだった。それまでの抜け殻のような様子は見られない。

「朔夜、お前その子どうするんだ？」

東城はその時知らなかったが、朔夜にはこの赤ん坊が自分の子である可能性を感じていたのだろう。

朔夜は赤ん坊をじっと見つめる。とうとう起きた赤ん坊はそれまでの不機嫌が爆発したのか、大声で泣き出した。

鳴き声が部屋中に響いた。それまでの静寂が嘘だったかのように泣く赤ん坊をあやそうとする東城。その様子を見て朔夜はクスリと笑った。

この一ヶ月、まったく表情を変えなかった朔夜に笑顔が戻った。

「秀、俺この子育てるよ」

「はあ？」

本気かと、本当に頭がおかしくなったんじゃないかと疑った。

本当に朔夜の子である証拠はどこにもない。そしてまだ高校生の少年が赤ん坊を育てる。無謀すぎた。

だが朔夜自信はすっきりとした笑顔だった。

「先生が言った言葉の意味が、少しわかった気がする。でも俺がそれをどうとろうと自由だよな」

「いや、意味がわからないんだが。俺にもわかるように説明してくれないか」

「名前考えなくちゃな。あ、こいつ男か。顔だけじゃわからないな」

「いや、人の話を聞いてくれ」

「んゝ。そうだ、暁斗にしよう」

「へ？ 早いな。っじゃなくて！」

「暁斗、お前今日から暁斗な」

よろしく、俺の息子・暁斗。

第十三話 夜明

東城の話はそれで終わりだった。東城自身実際に見たものは少なかった。ほとんど後で朔夜から聞いたものだ。

「あの後は本当に大変だった。家を出て自活し始めて、赤ん坊の世話なんてしたことがないから育児書を片っ端から読みあさった」

本屋で高校生が育児書を買う。かなり変な光景だ。

「朔夜はすぐに高校を辞めて今の仕事を始めた。軌道に乗るまでは両親に借金して、アパートを借りて」

あまりにも慌ただしくて時間の経過などわからなかった。

「さすがに高校生が父親になれるはずもないから最初は両親の養子という形にして、成人してから改めて籍を移した」

だから戸籍上は暁斗は朔夜の養子になるらしい。

「朔夜の両親はまったく手を貸してくれなかったからな。赤ん坊ってどうやって育てればいいんだって。理由もわからず泣き出すし、食べ過ぎで吐いた時は大騒ぎだったな。救急車を呼ぼうとしたっけ」

何だか暁斗自身恥ずかしくなってきた。

「まあよく乗り切ったなと我ながら感心するよ」

しみじみと言う彼も、まだ三十になったばかりのはずだ。子供を持つと大人は老けると言うが、まあ半分ぐらい暁斗は彼の子供のようなものだ。

「これで話は終わりだが、他に訊きたいことはある？」

東城が話の閉幕を告げる。暁斗は一つだけ気になっていたことを口にした。

「親父たちは常盤…もう一人については本当に何も知らなかったの？」

「ああ、何も知らなかった。双子だということさえ知らなかったん

だ。まあ最初からあの男が復讐のために利用しようとしていたから隠されてたんだろう」

復讐。あの男は父に復讐するために甥を利用しようとしたのか。

「その子については朔夜自信何とかするだろう。問題はあの男の方だが、まあここからは大人の問題だな」

「また子供は口出しするな？」

「そうじゃない。大人は自分の過去に責任を持たなければならぬんだ。それを子供にまで背負わせるのは親として最低だ」

自分たちの問題は自分たちで解決する。次の世代まで残してはならない。

「まだ詳しいことが訊きたいのなら朔夜に訊いた方がよい」

そう言つて東城は立ち上がった。気付けば時計は既に夕方を示していた。窓の向こうには夕日が見える。

ずいぶんと長い間話していたようだ。

「暁斗、今の話を聞いてどうするかは君自身が決めればいい。それは巻き込まれた側の権利だ。ただ、朔夜の味方としてはあいつを責めないで欲しい」

「秀一さんは結局親父の味方なんだね」

そう言つと東城はクスリと笑つた。

「当たり前だよ。あいつに最後までつきあえる人間なんて他にいないんだから」

東城の表情は晴れ晴れとしたものだった。

東城を玄関まで見送つた時、暁斗は言つた。

「秀一さん」

「ん？ 何だい？」

「俺の存在が親父を救つたつて言いましたよね」

「ああ」

「だけど、秀一さんがいたからだとも思いますよ」

東城は驚いたように暁斗を見た。

「親父自分のテリトリーに他人が入るの嫌うつて言つてたけど、秀

一さんが持つてきた観葉植物とか、親父文句言ったことないんですよ」

それって信賴しているってことだよな？

そう言つと東城はうれしそうに笑つた。

「ありがとう。本当に君は良い子だね」

そして東城は帰つて行つた。夕日に向かつて、振り返りもせず。そつえば母さんの名前は夏の夕だったな。暁斗はふと思ひ出した。

母さんも空にちなんだ名前だったんだな。

暁斗は明けの明星。

夕夏は夏の夕方。

そして朔夜の意味は朔の夜らしい。朔とは新月のこと。新月の夜に生まれたから朔夜と名付けられたらしい。

「そつえば蒼衣つてどつという意味だろう？」

母が付けたという名前。彼女はどんな意味でその名前を付けたのだろうか。

蒼衣は一人母の部屋にいた。

叔父に見つかれば叱られるかもしれないが、蒼衣が唯一家族を感じられる場所だった。

叔父はきつと本当の意味で自分を愛していない。姉の子として、復讐の道具として愛していたに過ぎない。

なら母はどうだったのだろうか。

あの日記を見る限り、生まれた自分たちを愛していたとは思ひにくい。自分の愛した人を奪つた男の子を産む。その行為の意味は、未だにわかつていない。あの日記にもそれは語られていなかった。それでも蒼衣はここで母のぬくもりに触れたかつた。おそらく自

分は父だという人に引き渡されるはずだったのだろう。しかし叔父がそうしなかった。姉の遺言を半分護り、もう半分を自分の復讐に利用しようとした。いや、もう一人は引き渡したことすら復讐の手立てだったのかもしれない。

愛していた息子に見限られる。そんな状況を望んだのかもしれない。

しかし蒼衣は幸いにも賢かった。叔父の狂気に飲まれなかった。それは幸運としか言えない。

会ったことのない父や兄弟に会えたことはうれしかった。自分が一人ではないと感じられたから。

同時に寂しかった。父に愛され、思いっきり生きているもう一人。本当なら自分もあの中にあっただけだったのに。いや、もしかしたら逆の立場となっていたことさえあり得るのだ。

そういう意味では暁斗に嫉妬したかもしれない。しかし蒼衣は歳の割には成熟した考えを持っていた。かつての朔夜にはなかったものだ。

母がどんなつもりで自分たちを産んだのかはわからない。しかし生まれた理由と生きる理由は別であつても構わないはずだ。

一度父だという人に会ってみよう。彼なら自分たちの生まれた理由を知っているかもしれない。

そしてもう一つ、訊いてみたい。それは名前の意味。

叔父も祖父母も誰も知らない自分の名前の意味。母がこの身体以外で残した唯一の贈り物。

知りたい。そしてできるのなら、あのぬくもりに少しでも触れてみたい。

自分も家族なのだと。

朔夜が帰ってきたのは彼が出かけてから三日ほど経った頃だ。土産に八つ橋とたこ焼き味の煎餅をくれた。土産に統一性がないのだが。

なんでも適当にぶらついていたら京都や大阪に行き着いたと言う。何がしたかったんだ、この人は。

どこまでも父は父のままだった。それが今はうれしかった。

ちなみに東城への土産は和歌山名物ミカン味の饅頭。おいしいのだろうか…。

あんだだけこちらは気をもんだというのに、当の本人はあつけられんとしていた。この姿では抜け殻のようだったという姿はまったく想像できない。

何だか欺された気がしてきた。

「それで？ 秀から話は聞いたんだろ？」

まったく前ぶりもなく緊張感もなく核心を突いてくれた。

「う、うん」

「それで？ お前はどうするんだ？」

態度こそいつもと変わらないが、朔夜自身にも考えるところがあったのだらう。

「どうって…」

「俺はお前等になら殺されてもいいと思ったぞ」

あまりにもぶつ飛んだ結論だそれは。

「まあそれは最悪の事態としてだ。だが嘘ではない。そう思ったぞ」
ただな、

「あいつの恨み言を聞いてたら考えを改めてな。ここで俺が死んだら後が面倒だなと思ったわけだ」

あいつとは常盤要という叔父のことだらう。いつの間に話をしたのかは知らないが、ここでその話を詳しく聞く気にはなれなかった。とにかく自分はある男が嫌いだ。

「生まれて来た以上、子供には生きる自由がある。それを大人が勝

手にしていいわけがない。俺が死んだらお前等がどうなるか心配になつてな」

できることなら自分が生きている内に何とかしておきたい。そう思つたのと言う。

「それでも俺を許すかどうかはお前等が決めていい。少なくともあいつよりはその権利がある」

そんなこと言われても、答えは決まっている。

「馬鹿じゃねーの」

突然馬鹿呼ばわりされて驚いたのだろう。本当に馬鹿面だ。

ああ、確かに東城が言つていたように、自分はこの父を美化しすぎていたのかもしれない。この人も一人の人間であることを忘れていたのかもしれない。

「恨むことなんて何もねーよ。勝手に悪者のふりするのやめろよ」
誰にだつて悪いところはある。過ちを犯さない人間なんてはいはない。

「あんたが悪者になればすつきりするかもしれないけど、こっちは納得できないんだよ。あんたは俺を育てた。愛してくれた。本当の悪者ならそんなことしねーよ」

本当の悪人とは、自分のしたことを罪と認めない者のことだと教わつた。

「常盤だつてあんたのことを恨んでなんていないよ。死んだ人間のことばっか気にしてたらやっていけねえよ。あんたは今生きてるんだろ？　だつたら今のことだけ考えてるよ」

じゃないと世の中楽しくないじゃないか。

言い切つた息子に、父は大笑いで答えた。

「はははははは！　お前つどこでそんな理論見つけてきた。っははは、無茶苦茶すぎだろっはは。ああ、もう腹が痛え」

「そ、そこまで笑うことないだろ。俺は大まじめなんだぜ」

「くつくつく、ああ、わかつてるよ。お前はそんな嘘つける奴じゃないものな」

まだ完全に笑いが止まらないらしい。くそつ、言うんじゃなかった。

「ああそうだな。もうこちら辺でケリつけた方がいいな」

もう決めたらしい。ならこれ以上自分が言うことは何もない。

「もし刺されたら立派な葬儀してやるぜ」

「お断りだな。俺は百まで生きるつもりだから」
ひ孫抱くまで死なねえよ。

「お前、本当に図太いな」

「今更気付いたか？」

「いや、結構前から気付いてた」

その日の夜、夕食に東城を招いた。東城は帰ってきた親友に、と
りあえずげんこつで迎えた。

「最初はかなり繊細なんだと思ってたよ。だけど暁斗が生まれてから
年々図太くなっていく気がする」

「たくましくなったのさ」

「無神経になっただけだろ」

元々他人への配慮などなかったのだ。親になってからさらにひど
くなった気がするが。

これが朔夜流の大人の生き方らしい。まあ確かに多少図太くなら
なきゃヤングパパなんてやっていけなかっただろう。

その分自分の神経がすり減っている気がするのは気のせいではな
いと東城は確信する。

「これで俺が胃潰瘍にでもなったら絶対お前の性だな」

「じゃあせいぜい胃を丈夫にしておいてくれ」

こういうところも相変わらずだ。まあ、これにつきあえなければ
今までもやっていけなかったのだが。そう言う意味では自分もずい

ぶん図太くなつたのかもしれない。いや、たくましくなつたのか。

「もう一人と会う機会は作れそうか？」

「そうだな、うるさいのがついてるからな。そっちは長期戦になりそうだからとりあえず置いておくとして、こっちはそれほど難しくないと思う」

「その根拠は？」

「勘」

「だろうな」

「やれやれ。結局は行き当たりばったりなわけだ。」

「そんなに心配しなくても向こうはそれほど頭悪くないらしい。話せばわかるさ」

「その根拠も勘か？」

「親の勘さ」

「なら期待しておくか」

とりあえず、父親の腕前を見せてもらおう。

その機会は意外にも早く訪れた。

次の日、朔夜は初めて夕夏の墓を参った。

彼女の親族からも断られ、自分自身どんな顔をすればいいのかわからなくて行けなかったのだ。

こうしてここに来られただけでもたいした成長ぶりだ。朔夜は自分を褒めてやる。

花屋で適当に花を買い、墓地までやって来た。場所だけは前から知っていた。教えて貰えなかった朔夜に秀がこっそり調べて教えてくれたのだ。さすが親友。いざというとき頼りになる男だ。

墓の前にいるのが彼だとすぐにわかった。何せ昔の自分によく似ているのだから。

少年は最初から来るのを予想していたかのように落ち着いていた。朔夜を見てペコリと頭を下げる。

「先日はどうも」

「ああ」

朔夜も応える。

「あの時は自己紹介もせずすみませんでした。常盤蒼衣といいます。詳細は言わなくてもわかるとおもいますが」

「さあな、他人を通じての紹介なんてあやふやなものだ」

「彼がいるのは墓の前だ。おそらくその墓が彼女の墓なのだろう。」

「先に花添えていいか？」

「どうぞ」

どうも、と礼を言って墓の前に立つ。墓石には『常盤夕夏の墓』と書かれていた。先祖代々の墓とは違い、ここは彼女一人の個室ら

しい。贅沢なことだ。

既に墓には花が添えられていたので、朔夜は持ってきた花を墓の前に置く。

「なあ、線香持ってるか？ 忘れてきたんだ」

「はい、どうぞ」

どうも、また礼を言っ受けて取った線香に火をつける。何で、マツチは持ってきて線香を忘れるのか。親友がここにいればそう言っできそうだ。

そういえばさっきから礼しか言ってない気がする。

線香を立て、しばらく拝んでみたが何も感じられない。幽霊とかいうものがいるのなら出てきてくれないかと少し期待してみたのだが。やはりファンタジーには期待できないな。

朔夜は立ち上がるがまだしばらく墓の前にいた。

「少し話いいか？」

「はい。僕もそのつもりで来ましたが」

「へえ？ 俺が来ること知ってたのか？」

確かそれを決めたのは昨日のはずだが。

「いえ、来てくれるかなと期待してただけです。一日目で会えたのだから運が良かった」

「なるほど、なら俺もかなり運が良いのかな」

どうだ秀。親の勘も捨てたものじゃないだろ。

しかしこの蒼衣という子供。暁斗とは対照的だ。礼儀正しいとは聞いていたが、どうにもやりにくい。子供はもつと活発な方がやりやすいのだが。

どう話を進めたらいいのか、悩むところだ。こういったタイプは何を考えているかわかりづらい。

朔夜がうーんと悩んでいると、幸いにも相手から話しかけてくれた。

「僕も訊きたいことがあるんですけど、訊いてもいいですか？」

「ん？ ああ良いぞ。そちらから先にどうぞ」

「では遠慮なく」

蒼衣は一度咳払いをする。

「あなたは僕達の母親が僕達を産んだ理由を知ってますか？」

これはまた直球だ。しかし恨み言でもなくそこに行き着くとは、なかなかよく出来た子ではないだろうか。

「聞いてますか？」

「ん、ああ聞いてるよ」

ついうれしくなってしまう、話を忘れてしまっていた。馬鹿な子供ほど可愛いと言うが、賢い子も可愛いじゃないか。

親バカ臭いが、これも親の自覚としておこう。

「理由についてだが俺も直接本人から聞いたわけじゃないから、推測の範囲になるがいいか？」

「はい、お願いします」

蒼衣の眼は真剣だった。おそらく彼は長い間その疑問を抱えてきたのだろう。その答えを心待ちにしていたのだろう。

この子なら何を言っても大丈夫そうだな。そう朔夜は確信した。

「先生はまあ俺を恨んでただろうな。だから俺と寝たのは決して愛情からでも慰めが欲しかったわけでもなかっただろう」

その意味ではあの人は実は弱くなかったのかもしれない。少なくとも強かに行動できるくらいには。

「俺に呪いをかけるって言うてた」

「呪いですか？」

「そう。俺はあの時のことだけだと思ってたが、暁斗を渡されて彼女の本当の企みを知ったよ」

彼女は呪いを形にした。決して忘れないように。

「消えない傷を残すためにお前たちを産んだ。まあそれが俺の結論だ」

「理解しづらいですね」

「まあ気持ちはわかる。女の恨みってのは怖いだよ」

自分の死すら利用する。復讐として子供を利用する。その意味で

はあの兄弟の方法は同じなのだろう。

「彼女は女であつても母ではなかったからな。俺は父になれたけど彼女は母になれなかった。それが彼女と俺の違いだよ」

暁斗を渡されたときにそれは気付いていた。だが腕の中で泣く赤ん坊に生を感じた。もう一度この子のために、今度は父として生きてみよう、そう思ったのだ。

「死んだのも俺に見せつけるためだろう。本当に嫌な人だな」

「母を恨んだりしなかったんですか？ あなたの罪云々よりも、それぐらいの権利はあなたにもあつたと思います」

「ああ、ないな」

「どうして？」

「惚れた弱みってやつだよ」

朔夜は笑っていた。ただ清々しく、何も重荷などないかのように。「とは言つても今も彼女を愛しているかは微妙な所なんだ。変に固定されたから今更変えられないんだよな」

「他に好きな人できなかったんですか？」

「んー、初恋が強烈すぎたからな。なかなかうまくいかないのよ」

朔夜はうーんと背伸びをする。今日は晴天。雨も雪も降らない。青空が広がっている。

「好きだったことは覚えてるのに冷めてしまったというのかな。どんな人間も時間が経てば変わってしまうんだよ」

あれだけのことがなければただの失恋で終わっていただろう。きつと本来ならその程度の恋だったのだ。

「本当に俺はあの人のことをそんなに好きだったのか。そう疑ったことさえあつたよ」

「それで答えは？」

「わからん。自分のことが意外と一番わからないことなんだよ」

お前も恋をすればわかるさ。

「訊きたいことはそれだけか？」

「いえ、もう一つ」

「何だ？」

「僕の名前の意味、知ってますか？」

これはまた意外な質問だ。

「母さんが付けた名前なんですけど誰も知らなくて。あなたなら知ってるかなと思って」

「んー、まあ想像はつくな」

「何ですか？」

「あれ」

そう言つて朔夜は空を指さした。そこには雲一つない青空が広がっている。

「えっと、意味がわからないんですが」

「昔先生が言つてたんだよ。空が色を変えるのは服を着替えているからだつて」

何かの童話だったのかもしれない。授業の合間の休憩時間、色が変わつていく空を見て彼女はそう言つたのだ。

「空はたくさん服を持つてるの。青い服もオレンジ色の服も黒い服も。その時によつて服を変えているの」

「じゃあ雲が出てるときは？」

「それは雲の模様がある服を着てるのよ」

またロマンチックというか、幼稚な話だ。

「あんたの名前つて空にちなんでるんでしょ？ 私もそうよ。夏の夕日が綺麗な日に生まれたから夕夏」

「じゃああんたが子供を産んだら空の名前を付けたいだろ」

「あら、それナイスアイデア。だったらあんたもそうしなさいよ。約束だからね」

それでまず一番に私に教えてね。

一番にという約束は果たせなかったが、空にちなんだ名前を付けるという約束は果たした。まさかあの人がその約束を果たすとは思わなかったが。

「青空は青い服を着ているようだから、蒼い衣で蒼衣。そんなとこ

るだろ」

良い名前だな。

もしかしたら先生は俺が思っていたほど恨んでなかったのかもしれない。わざわざ一人分の名前だけ付けたところからも、要の思惑とは別に彼女の思惑でもあったのかもしれない。最初から一人は残すつもりだった。

「恨んでくれた方が簡単だったのに。あんた本当に嫌な人だな」
本当に恨んでいたのなら、そんな良い名前付けないだろ。

「何か言いましたか？」

「いや、何にも。それよりその敬語何とかならないか。堅苦しくて仕方がないんだ」

「え？ あ、つい。けどどう言ったら良いのかわからなくて」

「そんな他人行儀にしなくていいんだよ。親子だろ？ もっと気軽に行けよ」

「え？ ええと。と、とう…」

父さんと呼びたいのだろう。しかし慌てているのかうまく言えないようだ。何だ、可愛いところあるじゃないか。やっぱり子供っていいな。

「あー今慌てなくてもいい。これから先、時間はたっぷりあるんだから」

そう、これは始まりでしかない。

まだ片付いてない問題だってある。だけど、今の自分たちなら問題ないと思えるのだ。

「親父、遅いなー」

「どこかで道草でも食ってるんだろ。先に食べてしまつか」

暁斗と一緒に昼食の準備をしている東城。親友の行動パターンはお見通しらしい。

その時、玄関の扉が勢いよく開かれた。

「皆月先生！ いつになったら原稿貰えるんですか！ もう締め切りはとつくに過ぎてるんですよ！」

朔夜の担当編集者・金森麗子だった。

「あ」

そういえば仕事のこと、すっかり忘れてたな。

「暁斗君、先生はどこ？ ケータイにかけてもまったく返事がないのよ！」

「あーええとー」

親父、まさか逃げたのか。

「あ、そういえば」

「？ どうしました？」

「いや、こつちの話」

「？」

実は朔夜自身、忘れてたりした。

「ま、いいや」

こんなに天気が良いんだし、たまにはこういう日も。

最終話 黄昏（後書き）

これにて完結です。最後まで読んでいただきありがとうございます。最初の設定からずいぶんと変わってしまいましたが、大筋は変わってないつもりです。この作品は最初朔夜の死で終わるはずだったのですが、いつの間にかこのようになっていました。今はこれで良かったと思っています。初めて完結させた長編なので、感動と共にこれからの自信にもなりました。良ければ他の作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3554i/>

あの日の空の色

2010年10月8日13時15分発行